

勢多だより

No. 99

JULY 11
2014

平成 26 年度新入生歓迎

平成 26 年度入学宣誓式

新任教員紹介

- 第 39 回浜松医科大学との交流会
- 平成 26 年度新入生研修
- 平成 25 年度卒業式



平成26年度 滋賀医科大学 入学式



勢多だより

JULY 11, 2014

C O N T E N T S



メインテーマ：「平成26年度新入生歓迎」

トピックス

- 01 | 平成26年度 入学宣誓式
- 03 | 平成26年度 新入生紹介

新任教員紹介

- | | | | |
|----|--------------------|-----|------|
| 06 | 外科学講座（心臓血管・呼吸器） | 准教授 | 鈴木友彰 |
| 07 | 社会医学講座（法医学部門） | 教授 | 一杉正仁 |
| 08 | 内科学講座（消化器・血液） | 教授 | 安藤朗 |
| 09 | 麻酔学講座 | 教授 | 北川裕利 |
| 10 | 臨床検査医学講座 | 教授 | 九嶋亮治 |
| 11 | 臨床看護学講座（母性看護学・助産学） | 教授 | 立岡弓子 |
| 12 | 看護臨床教育センター | 准教授 | 多川晴美 |

キャンパスライフ

- 13 | 第39回 浜松医科大学との交流会
 - 15 | 平成26年度 新入生研修
 - 18 | リーダース研修
 - 19 | 医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果
 - 20 | 卒業生からのメッセージ
- 厚生労働省看護系技官 松野文恵（第10期生）

図書館からのお知らせ

- 22 | 本学教職員が薦めるこの本2014

アジア疫学研究センター紹介

- 26 | アジアのトップリーダーとして活躍する非感染性疾患（NCD）対策の専門家育成を目指して
- アジア疫学研究センター 特任助教 久松隆史

国立病院機構 東近江総合医療センターだより

- 29 | 「国立病院機構東近江総合医療センター」の近況紹介
 - 31 | 呼吸器内科の紹介
 - 32 | 東近江総合医療センター消化器内科に赴任しました！
 - 33 | 泌尿器科の紹介
- 総合外科学講座 教授 来見良誠
総合内科学講座 助教 小熊哲也
総合内科学講座 助教 伊藤明彦
国立病院機構東近江総合医療センター 泌尿器科医長 坂野祐司

インフォメーション

- 34 | 平成25年度 卒業式
- 38 | 平成25年度 学位授与式
- 39 | 平成25年度 学位論文学長賞等授与式
- 40 | 名誉教授の称号授与
- 40 | 第37回 解剖体納骨慰霊法要

編集後記（宮松編集長）

トピックス

平成26年度 入学宣誓式

学 長
塩 田 浩 平

入 学 式 式 辞

本日ここに、ご来賓各位ならびに本学教職員の方々にご臨席いただき、平成26年度滋賀医科大学入学宣誓式を挙行できますことを、心よりうれしく思います。

滋賀医科大学に入学された医学科100名、看護学科70名の皆さん、おめでとうございます。また、これまで物心両面で献身的に支えてくれたご家族の皆様にも心からお慶びを申し上げます。

この冬は殊の外寒さが厳しく、また豪雪に見舞われた地方もありましたが、その中でたゆまぬ努力を続け今日を迎えられた皆さんの喜びはひとしお大きいものと思います。本日のこの清々しい緊張感を忘れず、これからの6年間または4年間、医学と看護学の勉学に打ち込んでください。皆さんをここまで育んでくださったご家族の皆様、指導し励ましてくれた先生方、また、互いに切磋琢磨したすばらしい友人の方々に感謝していただきたいと思います。

大学院博士課程へ進学された28名、修士課程へ進学された14名の皆様、ご進学おめでとうございます。皆さんには、医学・医療や生命科学の目覚ましい進歩の中で、先進的な医学・看護学の研究にチャレンジし、大きな研究成果を挙げて医学と看護学の進歩に貢献されることを期待しています。

滋賀医科大学は、今年創立40周年を迎えます。わが国の大学の中では若い方に属しますが、本学は今まさに発展の途上にあり、これからの飛躍のためには優秀で意欲ある若い皆さんの力が不可欠であります。40歳は人間では「不惑」の年に当たり、迷わず自らの道に邁進すべきとされる時期であります。これまで多くの先達が大変

なご苦勞の中で築き上げてこられた礎の上に、学内の力を結集して更に大きな発展を期したいと考えています。新しく滋賀医科大学の一員となられた新入生の皆さん、そして保護者の皆様のご協力を心からお願いいたします。

学部へ入学された医学科と看護学科の皆さん、皆さんは医師・看護師となり、あるいは医学・医療の研究を行おうという決意をもってこの滋賀医科大学へ入学されました。医師・看護師という職業はいずれも、病める人を助け、治療し、自らの手と能力で人類の健康と福祉の増進に貢献できる、重要でやりがいのある仕事です。卒業後に立派な医師・看護師として活躍できるように、充実した大学生活を送り、真の実力を身につけていただきたいと思います。

大学での学習は、単に講義を聞いてその内容を暗記し試験に通ることが目的ではありません。これから皆さんに要求されるのは、学んだことを咀嚼し、自らの頭で考え、わからないことは調べて、自分で解決法を見いだすことであります。これは、到達目標がはっきりしていた高校までの勉強とは根本的に異なるところです。勿論、医学や看護学の内容は、まず記憶しなければならないことが非常に沢山あります。しかし、その知識をもとに、ぜひ自分で深く考えるという習慣を大学時代に身につけてください。論語の中に「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」という孔子の言葉があります。その意味は、『物事を勉強するだけで自分の頭で考えることがなければ、本当の知識は身につかない。一方、自分で考えるだけで先生や書物から学ばなければ独断・独善となり危険である』ということです。

いま、世の中には情報があふれ、必要な情報は居ながらにしてすぐ手に入る時代になっています。わからないことは即座にインターネットで検索するのが多くの人の習慣になっているかもしれません。しかし、皆さんが将来仕事をする臨床の現場では、一人一人の患者さんが個性をもった人間であり、体や病気の状態も教科書通りではありません。その意味で、医療の実践は一例一例が応用問題なのです。いかなる状況でも、難しい応用問題に自信を持って対処できるように、基礎的な学識とそれを応用する能力を大学時代にしっかりと身に付けていただきたいと思います。

す。

20世紀前半に活躍したイギリスの詩人・劇作家であり、1948年にノーベル文学賞を受賞したT. S. Eliotは、詩劇『The Rock』(1915)の中でこう言っています。

Where is the knowledge we have lost in information ?

Where is the wisdom we have lost in knowledge ?

我々は大量の情報 (information) にさらされ、本当に必要な知識 (knowledge) を見失っているのではないだろうか。また、知識を重視するあまり、本当に必要な「知恵 (wisdom)」を我々は失っているのではないか、という指摘です。我々は、手軽に情報を得たことで自分が物事をわかったつもりになってはいないか、常に反省する必要があります。大学では、与えられた事柄を鵜呑みにするのではなく、それを基礎にして自らの考えを確立し、批判精神と正しい判断力を身につけるための勉強をぜひ心がけてください。

医学と医療は日進月歩で、新しい発見や治療法の開発が次々と進められ、医療は加速度的に進歩しています。これは、近年のiPS細胞研究など再生医療やロボット手術などの例を見てもよくわかるでしょう。将来、皆さんが医師や医療スタッフとして活動していく中で、学生時代に学んだことのない新しい診断法や治療法が沢山出てきます。また、皆さん自身がこうした医療のイノベーションに関わる機会も少なくないと思われます。その意味で、皆さんはこれから一生が勉強の連続であります。

時代はいま激しく変化しており、科学や医学の分野における進歩は勿論、政治・経済、社会構造なども激動しています。そのような時代において、皆さんの将来は平坦ではないけれども、限りない可能性を秘めたものであります。そのような将来に自らの力を存分に発揮できるだけの実力をぜひ若い時代に身につけ、大きな夢を持って、困難な課題にも果敢にチャレンジしてください。

もう一つ、新入生の皆さんに要望しておきたいことがあります。皆さんの多くは、将来、医学の実践の最前線で仕事をするようになります。そのときに重要なのは、健康な体、強靱な精神力、そして深い教養と豊かな人間力です。そのためにも、これからの大学の数年間をどう過ごすかは極めて重要です。大学時代には、スポーツを楽しむ、文学や芸術にも親しみ、多くのよい友人を作ってください。滋賀医科大学における皆さんの大学生活が充実して楽しいものになることを心から願っています。

さて、大学院博士課程ならびに修士課程へ進学された皆さん、皆さんが大学院においてこれ

から行おうとする研究は、それぞれの専門分野の最先端を追求すると同時に、次の時代の学問の新しい地平を切り開く仕事になります。20世紀の研究においては、学問分野の専門分化が進み、研究手法の進歩とも相まって、それぞれの分野で詳細な研究が進展しました。20世紀半ばには、物理化学が生物学と結合して分子生物学が起こり、生命現象の解明やゲノムの解読が進みました。20世紀後半はまさに生命科学の時代であった、と言えます。その発展が今日のゲノム創薬や再生医学の進歩をもたらしたのです。しかし、限りなく細かく研究を進めていく要素還元的なアプローチが、ある意味で曲がり角に来ています。いま求められているのは、研究における既成概念を打破する斬新な発想であります。皆さんは、ぜひとも新しい時代を切り拓く個性的な研究を行う、という気概を持って研究にチャレンジしてください。研究は、苦難が多く、競争も激しい世界ですが、それだけにやり遂げたときには大きな達成感と喜びを感じることができるのです。皆さんの奮闘を期待しています。

研究において重要なことは色々ありますが、ここでは、研究者の倫理について皆さんに考えていただきたいと思います。研究者は高邁な理想と高い倫理観をもって日夜研究に励んでいるというのが、一般の人々の受け取りであり期待でもあらうと思います。しかし、昨今わが国で医学研究を巡って話題になっているいくつかの事例は、残念ながらこうした期待を裏切り、大多数のまじめな研究者の信用を傷つける結果になっていることを誠に遺憾に思います。謙虚な気持ちで研究を行い、その結果を正しく評価できるだけの学識と科学的素養を身につけてください。競争心や功名心と無縁に研究を行うことは今の時代には難しいかもしれませんが、常に研究者としての良心、正しい倫理観、そして自分の目で確認した結果だけを信じるという、研究者としての基本的態度を忘れずに研究を行ってください。その意味で、大学院時代は、研究者としての基礎的な能力を獲得するためのトレーニングの期間であると同時に、科学者としての素養と心構えを身につける、極めて重要な時間でもあります。皆さんが素晴らしい研究成果を挙げ、大学院生活が真に実り多いものになるよう、願っています。

新入生の皆さん、我々が皆さんの将来に期待する所は非常に大きなものがあります。どうか初心を忘れることなく、健康で充実した大学生活、大学院生活を送ってください。

本日は、誠におめでとうございます。

平成26年4月3日

医 学 科 新 入 生

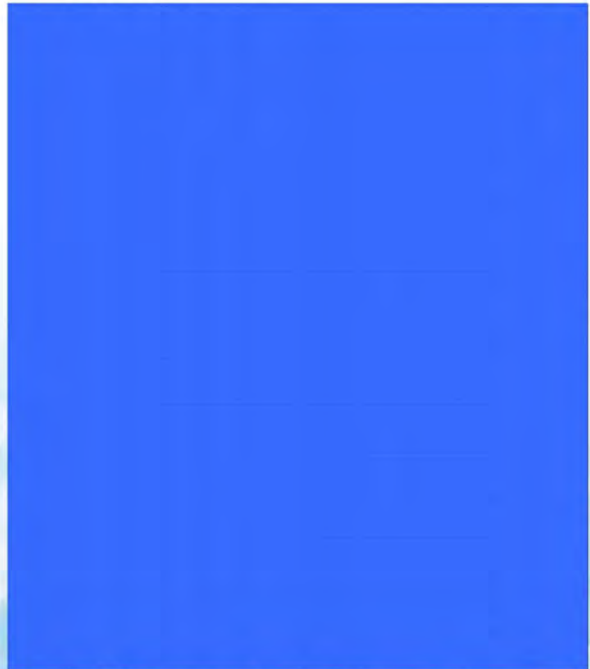
平成26年度 滋賀医科大学 入学式



■医学科Aクラス



■医学科Bクラス



■医学科出身校所在地都道府県別入学者数

都道府県	男	女	小 計
宮 城	1		1
福 島	1		1
東 京		2	2
神 奈 川	1	1	2
新 潟		1	1
静 岡	1		1
愛 知	2	1	3

都道府県	男	女	小 計
滋 賀	14	6	20
京 都	14	14	28
大 阪	9	6	15
兵 庫	3	1	4
奈 良	11	2	13
鳥 取		1	1
岡 山		1	1

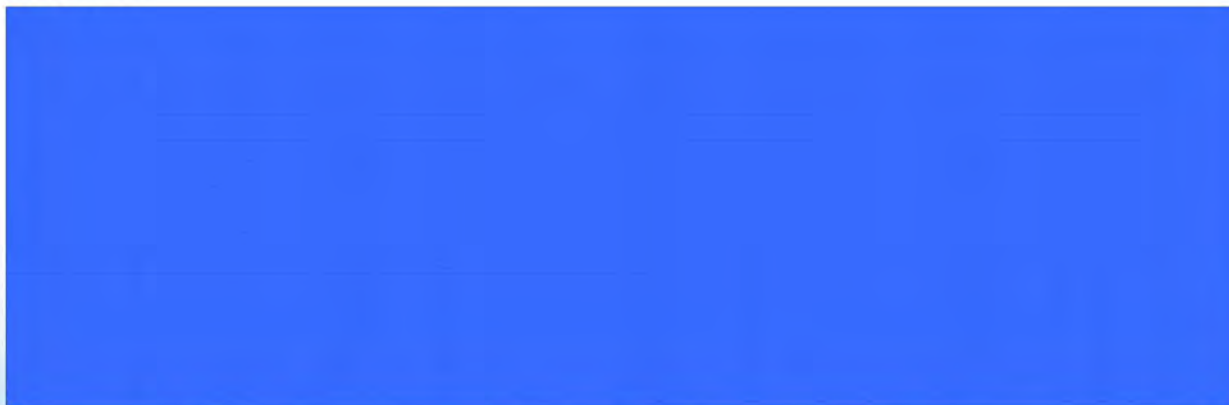
都道府県	男	女	小 計
徳 島		1	1
香 川	2		2
愛 媛	1		1
高卒認定	3		3
合 計	63	37	100

看護学科新入生

平成26年度 滋賀医科大学 入学式



■看護学科



■看護学科編入学者



■看護学科出身校所在地都道府県別入学者数

(第1年次入学者)

都道府県	男	女	小計
静岡県		1	1
滋賀県	1	34	35
京都府	1	11	12
大阪府		9	9
兵庫県	1	1	2
外国の学校等		1	1
合計	3	57	60

(第3年次編入学者)

都道府県	男	女	小計
神奈川県		1	1
三重県		1	1
滋賀県		3	3
京都府	1	1	2
大阪府		2	2
兵庫県		1	1
合計	1	9	10

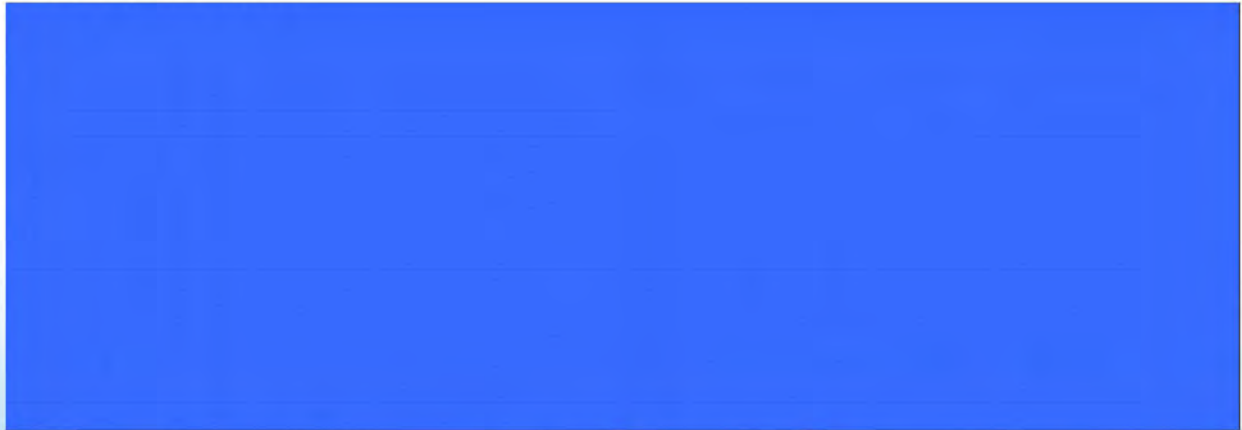


大学院 医学系 研究科

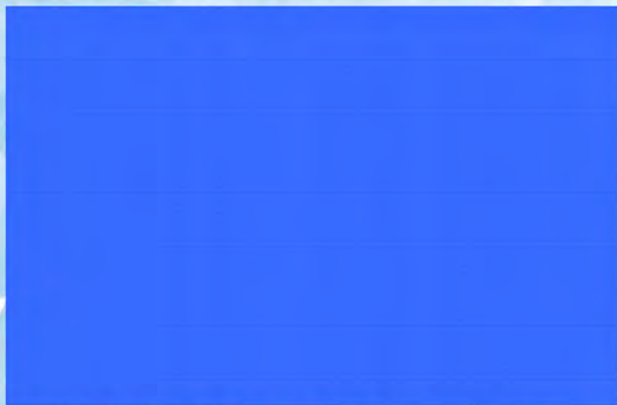
平成26年度 滋賀医科大学 入学式



■大学院博士課程入学者



■大学院修士課程入学者



入学生宣誓

在学生歓迎の言葉



新任教員 紹介

外科学講座 (心臓血管・呼吸器)



准教授

鈴木友彰

このたび外科学講座（心臓血管・呼吸器）准教授を拝命いたしました。

私は三重県鈴鹿市の出身で、1997年3月に島根医科大学を卒業し三重大学胸部外科に入局、医師としてのキャリアをスタートしました。当時はスーパーローテーションなる優れた研修制度はなく、それぞれの医局が独自のシステムで研修医を抱えている状態でした。時は外科バブル後半期であり、同期が4人、ひとつ上の先輩が4人、ひとつ下が4人、ふたつ下が5人という今からではとても考えられない人数の研修医が一つの心臓外科教室に入ってきていました。

同じ年代の人数が多くてさぞかし賑やかで楽しかったであろう、と思われるかも知れませんが、教室側からすると有り余る研修医があふれ返っている状態です。今から思えば、それはそれはぞんざいな扱いを受けていました。大勢いる

研修医の中でなにか光るものがなければいけません。自己アピールが必要です。先輩方からは全く相手にされません。人数が多すぎてうんざりなのです。放置状態です。

しかし、放置されたまま何もしなければどんどん遅れていきます。いつまでも先輩に認めてもらえることはありません。外科医は先輩から仕事を教えていただけない限り成長はありません。理屈抜きです。放置されたからといって帰宅したり休憩したりできるわけではありません。よし休憩しろ、めし食っていいぞ、帰っていいぞ、などと言ってももらえることはありません。ずっと病院にいるしかありません。いつ食事をしたらいいいのか、いつになれば寝てもいいのか、誰も言ってくれません。いつ何を指示されてもいいように、できれば自分が指示をもらえるように、常にアンテナを張り、先輩の周囲にいるしかありません。

しかし、いつになっても決して何か言ってももらえるわけではありません。何を言われてもすぐに反応できるよう準備しておかなければいけません。そんな状態が一年半以上続きました……。この時期に、私は次のことを、本当の意味で学びました。それまでも小学校や中学校の先生から、同じようなことを聞いたことがありました。しかし、本当の意味は分かっていませんでした。「お前のことを想っているから叱っているんだぞ」。人から叱られるということは実は、素晴らしい幸せなことなのです。

強くやさしい心臓外科教室を目指します。

経歴

1997年 3月 島根医科大学卒業
1997年 4月 三重大学医学部胸部外科 研修医
2001年 7月 高知市立市民病院心臓血管外科

2005年 4月 滋賀医科大学心臓血管外科 助手
2010年 3月 滋賀医科大学心臓血管外科 講師
2014年 3月 滋賀医科大学外科学講座（心臓血管・呼吸器）准教授

社会医学講座 (法医学部門)



教授
一 杉 正 仁

本年4月1日付けで社会医学講座法医学部門の教授を拝命致しました。東京、神奈川、栃木に居住しておりましたので、関西の勤務ははじめてでございます。どうぞ宜しくお願いいたします。

法医学では、突然死、事故や事件による死亡に対して、正確な死因を究明し死に至るメカニズムを解明することが本務であり、死体検案や法医解剖が主たる業務です。法医学では正確な診断を行うことは生命線ですので、臨床医学と目的を異にすることはございません。特に本学は滋賀県の法医解剖を担当する唯一の機関でございます故、臨床経験を有する医師を集めて、責任をもって業務を遂行して参ります。

法医学では診断精度の向上に関する研究の他、予防医学に関する研究が主となります。私は交通外傷の予防、血栓症突然死の病態解明と予防、事故予防などの研究に取り組んで参りました。International Traffic Medicine Association の 東

アジア地区担当理事として国際的な交通外傷予防に取り組んでおりますが、傷害バイオメカニクスの知見を駆使し、交通安全環境研究所、名古屋大学大学院、東京都市大学、本田技術研究所等と医・工・産学共同研究を進めております。将来は、本学が日本における交通外傷研究の発信地となることを目標にしたいと思います。また、高齢運転者の増加に伴って発生する自動車事故、児童虐待、薬物中毒などの、未解決の社会問題を予防すべくエビデンスの確立を目指しております。将来、当講座の研究成果が、臨床領域では早期診断に、司法領域では事件の解明に、社会医学では予防の推進に役立つことを願っております。また、滋賀県医師会、県の健康福祉部、県警察本部、検察庁と連携して地域の治安維持、安全の推進に務めております。県で唯一の医科大学として地域社会に貢献することも重要な使命と考え、積極的に協力して参ります。

突然死や事故は、いつでもどこでも起こります。また、若年者の薬物使用や虐待など、法医学に関する事案は身近に多く生じています。したがって、院内の医療安全や臨床現場でのコンサルテーションに積極的に応需する所存です。近年、全国的に剖検率が低下しておりますが、当講座では昨年に140体の法医解剖がございました。剖検は診断のゴールドスタンダードである故、所見をフィードバックすることで診断精度の向上や早期治療に役立てて参ります。法医学の立場から本学の発展ならびに地域の安全に尽力して参りますので、皆様方の忌憚のないご指導、ご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

経歴

1994年 3月	東京慈恵会医科大学卒業	2002年12月	獨協医科大学法医学講座助教授
1994年 4月	川崎市立川崎病院内科勤務	2010年 4月	東京都市大学工学部機械工学科 客員准教授(現在に至る)
2000年 3月	東京慈恵会医科大学大学院医学研究科博士課程修了	2013年 4月	滋賀医科大学社会医学講座(法医学部門) 教授
2002年 4月	名古屋大学大学院工学研究科 非常勤講師(現在に至る)		

内科学講座

(消化器・血液)



教授

安 藤 朗

2014年4月1日付けで、滋賀医科大学内科学講座（消化器、血液）教授に着任いたしました。母校の内科学講座を担当することになった重責に身が引き締まる思いです。初代細田四郎教授、馬場忠雄教授、藤山佳秀教授が築いてこられた伝統を継承しつつ、さらなる飛躍をめざして教育・研究・診療に取り組む所存です。

私は1984年（昭和59年）に滋賀医科大学を第4期生として卒業し、当初、血液内科医を志して第二内科（現在の消化器・血液内科）に入局しました。その後、学位のテーマが末梢血単球に関するものであったことから免疫学に興味を抱き、腸管免疫、炎症性腸疾患診療に少しずつ専門がシフトしていきました。白血病補助療法として抗真菌剤経口大量療法を開発したことや新しい赤血球膜蛋白欠損症の家系を発見したことなどは

血液診療での懐かしい思い出です。1995年に馬場教授のもと第二内科の助手に採用いただき、本格的な消化器内科とくに炎症性腸疾患の研究、臨床を開始しました。馬場教授からは免疫学にとどまらず、栄養学の魅力、奥深さを徹底的にお教えいただきました。炎症性腸疾患病変粘膜におけるIL-17産生T細胞（現在のTh17）に関する研究もこの頃のものです。藤山教授のもとでは、理化学研究所との共同研究として腸内細菌研究が大きく飛躍しました。このような流れの中で、2009年に本学の大学院教授を拝命し現在に至っております。ここまで消化器血液内科同門の先生方のみならず、当時の検査部の越智教授、岡部教授をはじめ多くの先生方にご支援いただきましたことに心より感謝申し上げます。

消化器内科領域では、内視鏡診断、内視鏡治療の進歩が著しく、ともすると内視鏡診療技術や画像診断能力の習得に主眼がおかれ、幅広い知識に基づいて病態を解析し治療方針を構築するという態度がおろそかになることがあります。血液内科領域もその多忙な臨床ゆえに研究に向き合う態度がおろそかになりがちです。是非、我々がこれまで取り組んできた臨床課題に立脚した研究活動を伝承することで、臨床も研究もできるリサーチマインドを持った消化器、血液内科医を育成していきたいと考えています。今後大きく発展すると予想される消化器領域での再生医療の展開に備え、消化器、血液両診療科の垣根を越えた基礎研究、臨床研究の展開を目指していきたいと考えています。

経歴

1984年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
 1984年 6月 滋賀医科大学附属病院 研修医（第二内科）
 1986年 5月 社会保険滋賀病院内科 医員
 1988年 4月 滋賀医科大学大学院医学研究科博士課程入学
 1991年 4月 日本学術振興会 特別研究員
 1992年 3月 滋賀医科大学大学院医学研究科博士課程修了
 1993年 3月 滋賀医科大学検査部 助手

1995年 2月 滋賀医科大学医学部第二内科 助手
 1998年 5月 滋賀医科大学第二内科 学内講師
 1999年 9月 ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院留学
 2005年10月 滋賀医科大学消化器内科講師
 2009年12月 滋賀医科大学大学院感染応答・免疫調節部門（消化器免疫）教授
 2014年 4月 滋賀医科大学医学部内科学講座（消化器・血液）教授

麻酔学講座



教授

北川 裕 利

2014年4月1日付けで滋賀医科大学麻酔学講座教授を拝命致しました。2013年7月に本誌にて麻酔学講座准教授就任のご挨拶をさせていただき、自己紹介と手術麻酔の現況と取組みについて書かせていただきました。そこで今回は私が考えている麻酔医療と講座運営について述べさせていただきます。

麻酔医療の最重要課題は安全な周術期患者管理の確立であると考えています。最近は麻酔薬による臓器保護効果が注目されており、手術前の状態や手術の種類を考慮した麻酔管理により術後患者のmorbidityが低減できる可能性が出てきました。私自身も吸入麻酔薬による心筋保護効果について研究してきたことから、これらのエビデンスを踏まえた患者状態に適した麻酔管理法を選択すべきと考えています。安全な麻酔は麻酔前診察による患者状態を把握して至適麻酔法や麻酔薬を主体的に選択すること、正確で安全な麻酔手技を実践すること、術後診察と自分の行った麻酔の判断とその結果を真摯に評価して次の症例にフィードバックすることの積み重ねが大切であ

ると思っています。

次に研究についてですが、臨床麻酔業務と同様に本学麻酔学講座の生命線と考えています。日々の臨床の中で生じた疑問を解決したい、新しい技術や知識を獲得したいという動機が大切で、それらを研究する過程で培われる考え方は麻酔の技術や問題対処能力を向上させます。特に自分自身で取り組んだ研究結果が臨床に活かされた時、大きな自信となります。その自信は同僚や外科系医師、手術室スタッフの信頼に繋がり、結果として医学生、若手医師の目標となれば、優秀な教育者にもなると思います。このように臨床と研究を通して教育者へと先導することで、大学講座としての責務を果たしていきたいと思っています。

以上、本学麻酔学講座にはまだまだ果たすべき役割が多くあると思いますが、近年の後期研修医の進路に目を向けると、特に麻酔科医の大学病院離れが顕著です。今年度は滋賀医大卒業生の10名以上が後期研修として麻酔科を選択していますが、そのうち8割以上が市中病院で勤務していると聞きます。慢性的マンパワー不足による荷重労働と疲労、日々の臨床業務をこなすことで精一杯で夢や学問的興味を失ってしまった大学麻酔科医の姿があったのではないかと反省しています。まずは働きやすい労働環境を整備し、手術麻酔を核にペインクリニックや集中治療などのサブスペシャリティを身につけられるような臨床研修システムを構築し、さらに留学や研究などの個々人のキャリアプランを実現できるようにし、輝きと希望に満ちた麻酔科医の姿をお見せできるようにしたいと思います。そのためには大学や病院の執行部、各診療科、コメディカルの皆様方の力をお借りしなければなりません。今まで以上に一層のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

経歴

1991年 3月	滋賀医科大学医学部医学科卒業	1998年 4月	市立長浜病院麻酔科 医長
1991年 6月	滋賀医科大学医学部附属病院 医員（麻酔科研修医）	2001年 4月	市立長浜病院麻酔科 部長
1992年 9月	滋賀医科大学医学部附属病院麻酔科 助手	2002年 4月	滋賀医科大学医学部附属病院麻酔科 助手
1994年 1月	市立長浜病院麻酔科 医員	2006年 2月	滋賀医科大学麻酔科 講師（学内）
1995年 10月	COE 特別研究員 （国立循環器病センター研究所循環動態機能部血行動態研究室）	2011年 4月	滋賀医科大学麻酔学講座 講師
1996年 3月	市立長浜病院 ICU・CCUセンター長	2013年 5月	滋賀医科大学麻酔学講座 准教授
		2014年 4月	滋賀医科大学麻酔学講座 教授

臨床検査医学講座

(検査部・病理部・輸血部・病理診断科)



教授

九 嶋 亮 治

このたび平成26年4月1日付けで、臨床検査医学講座教授に就任するため、5年間勤めた築地の国立がん研究センター中央病院での職を辞し、母校に戻ってまいりました。生まれ育ちは京都の太秦ですが、滋賀といえば小学生の頃は国鉄草津線の撮影、中高生時代は沢登りなどで比良山系に通っておりました。浪人生活を経て、滋賀医科大学医学部に6期生として入学、体育会水泳部の組織作りやプールの建設に参画し、スキー部では厳しくも温かい上下関係を経験しました。在学中偶然手にした「病理医覚え書」(金子仁著、日本醫事新報社)と、発刊されたばかりの「病理と臨床」(文光堂)という雑誌に触発され、当時はあまり知られていなかった「病理医」なるものを目指すことにしました。病理学第一講座初代教授の竹岡成先生と私の前任である岡部英俊先生に病理学の手ほどきを受け、福井医大から異動され当時最年少教授であった服部隆則先生の本学最初の弟子になりました。

大学卒業当時、病理といえば(特に関西では)「実験病理」が主体で、学生時代に思い描いていたイメージとは異なっていました。小学時代から趣味の鉄道がらみで社会科は好きでしたが、理科実験はどうしても馴染めず、ここは居場所ではないと感じつつもしがみつてきました。胃癌の大家である服部先生も私の思いをよく理解していただき、ヒト胃癌に関して診断に直接関連する研究で多くのチャンスを与えて下さいました。本学卒業生として初めてフンボルト財団奨学生として渡独する機会にも恵まれました。ドイツの素晴らしい勉学環境を多くの滋賀医大生に追体験してもらいたく、夏期自主研修として計15名の学生をドイツ各地の

大学や病院に派遣しました。築地の病院にも10名の本学学生が実習に来てくれました。この5年間、さらに多くの外国人病理医と親しく交流することができましたので、ドイツ以外にも多く学生が研修できるよう準備を始めたところです。

病理を専門とする私に課せられた大きな使命は「病理医の育成」と「病理診断業務の充実」であります。私は平成10年、栗東にある済生会滋賀県病院に病理科を創設し、2年余り「ひとり病理医」を経験しました。病理医不足は極めて深刻であり、以前本学に勤めていた頃も、彦根市立病院、国立滋賀病院、公立甲賀病院、琵琶湖養育院病院など関連各病院へ病理診断業務のために走り回っておりました。今後もこの繋がりを大切に、基礎の病理学講座と病院病理部との垣根を取り払い、オール滋賀体制で、しかも国内外でも研修できるような魅力ある病理医育成システムを作らなければなりません。日常の病理業務では、卒前卒後教育を念頭に置き「検体処理から診断まで病理医がカバーする」という当たり前の業務体制を診療各科ならびに基礎講座の協力を仰ぎながら充実させたいと考えております。

本講座は附属病院の検査部、病理部と輸血部を統括しています。病理以外の検査についての専門的事項は私自身にとってこれから勉強していかなければなりません。前任地でも病理・臨床検査科という標榜のもと、技師長と二人三脚、一蓮托生の覚悟で、検体取り違えから訴訟まで様々な問題に対処してまいりました。医療安全の基本は良好なコミュニケーションと、鉄道と同じく指差喚呼(しさかんこ)であることを身にしみて感じました。当院でも非常に限られた人数で身を粉にして働いておられる臨床検査技師諸氏には日々頭が下がる思いです。検査部の主役である検査技師の負担を軽減し各自の専門性をいかんなく発揮できる職場環境作りに努めたいと考えております。国立大学病院の臨床検査技師としては、日常検査業務に加えて、学術的な面でも指導的立場になってほしいと願っています。個人的には消化管診断学を専門にしておりますので、関係各講座と協力して本学におけるこの分野を世界水準に引き上げることに協力ができれば幸いです。

これまで基礎教室、外国、市中病院、大学病院、high volume centerなど性格を異にする様々な施設で経験・蓄積したことを活かして、母校の教育・診療・研究の発展に粉骨砕身努力する所存です。最後になりましたが、本年3月に91歳の天寿を全うされた恩師竹岡成本学名誉教授に心から感謝します。病床で私の就任決定を大変喜んでおられたと聞いております。謹んで哀悼の意を表します。

経
歴

1986年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
1986年 6月 滋賀医科大学医学部附属病院 研修医・医員(検査部、病理学第一講座)
1989年 4月 滋賀医科大学大学院医学研究科入学(病理学第一講座)
1993年 4月 滋賀医科大学病理学第一講座 助手(この間1995～1996年デュッセルドルフ大学病理学研究所にドイツ連邦共和国フンボルト財団奨学生として留学)
1998年 1月 恩賜財団済生会滋賀県病院病理科 医長

2000年 4月 滋賀医科大学臨床検査医学講座 助教授
2003年 5月 滋賀医科大学医学部附属病院病理部 助教授
2009年 4月 国立がんセンター中央病院臨床検査部 医長
2010年 4月 独立行政法人国立がん研究センター中央病院病理・臨床検査科 医長・副科長
2014年 4月 滋賀医科大学臨床検査医学講座 教授、検査部・病理部・輸血部 部長、病理診断科 科長

臨床看護学講座 (母性看護学・助産学)



教授

立岡弓子

2014年4月1日付で、看護学科臨床看護学講座(母性看護学・助産学)の教授に着任しました。滋賀医科大学には、3年前より非常勤講師として勤務していました。大学院修士課程の講義や助産診断・技術学で乳房ケアに関する講義を担当させていただいた頃には、自分が、この滋賀医科大学に教員として勤務するとは思っていませんでした。温暖な気候の静岡県静岡市清水区から、1年半前に転居してきました。静岡生まれ静岡育ちの私は、いつも富士山とみかん畑、茶畑が視界に入る生活でしたが、京都市内に住むようになってから、初めて積雪の生活を経験し、スタットレスタイヤをはめました。京都御所や平安神宮といった歴史的建造物を観ながら、そして琵琶湖を眺めながら車で京都から通勤しています。季節の移り変わりがとても綺麗だと感じています。自宅のリビングから大きく見える富

士山が恋しくもなりますが、滋賀には、形が富士山に似ている三上山という近江富士があります。なぜなのか、とても好きな山になりました。

約1年間、滋賀医科大学看護学科で勤務をして感じていたことは、臨床で活躍されている大学病院の看護職の方々と教員との距離が近いということです。学内の講義・演習に参加していただく機会が多いこと、また臨床に教員が出向い、交流をもったりすることがスムーズに行えることが新鮮でした。研究活動においても、互いに協力しあって高めあえるような刺激をいただいています。助産師としての自分、教員としての自分の両方をこの滋賀医大でなら高めて前向きにやっていけるように感じています。

臨床助産師として約12年の経験がありますが、多くの分娩介助や乳房ケアに携わっていくなかで、何気なく日常的に行われている助産ケアを客観視して、根拠をもったケアを確立していくための研究の必要性を強く感じるようになり、看護大学、看護系大学院へ進学し、研究活動を15年間続けてきました。昨年は、これらの研究成果をまとめた「乳房ケアのエビデンス」という著書を発刊することができ、多くの反響をいただく機会に恵まれました。

これからも助産師不足がクローズアップされるなか、幅広い視点で分娩に特化することのない次世代の健康のために、健康支援のできる助産師の育成に取り組んでいきたいと思っています。そして、輪があり、楽しく笑顔のある領域のメンバーとともに精進していきたいと思っています。

経歴

1990年 3月	北里大学看護学部看護学科卒業	2007年 4月	国立大学法人名古屋大学医学部保健学科看護学専攻 准教授(2010年3月まで)
1990年 4月	北里大学病院 助産師		国立大学法人名古屋大学大学院医学系研究科博士課程(前期課程・後期課程) 准教授
1995年 4月	立岡産婦人科医院 助産師	2010年 4月	おいしレディースクリニック 助産師
1995年 9月	東京大学医学部家族看護学教室 研究生	2011年 9月	順天堂大学保健看護学部前任 准教授
1998年 3月	北里大学大学院看護学研究科博士前期課程修了	2013年 1月	滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座 准教授
1998年 4月	静岡県立大学看護学部 助手	2014年 4月	滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座 教授
2003年 3月	北里大学大学院看護学研究科博士後期課程修了		
2006年 4月	国立大学法人名古屋大学医学部保健学科看護学専攻 助教授		

看護臨床教育センター



准 教 授

多 川 晴 美

平成26年4月1日付で、滋賀医科大学医学部附属病院看護臨床教育センターの准教授に就任いたしました。看護臨床教育センターは、平成21年度文部科学省大学改革推進事業「看護師の人材養成システムの確立」において、本院看護部の「臨床教育看護師育成プラン～専門分野の知を結集し臨床看護教育者を育てる」が選定され、平成21年12月1日に設置されました。このプランは、ジェネラリストのキャリアアップと臨床看護の質を高めるために、ジェネラリストを教育する臨床看護教育者を育成することを目的としています。現在はこのプログラムを受講し臨床教育看護師として認定された看護師が、看護学科演習にも参加し学部と臨床との連携を深めています。

私は、滋賀県立短期大学看護学科卒業後、滋賀医科大学医学部附属病院に就職し、心臓外科、手術部、ICU、脳外科、消化器外科病棟と主に外科

系病棟で勤務し、今日まで医大でお世話になっております。平成26年3月までは、副看護部長として地域医療連携を担当させていただいていました。その業務のひとつとして患者支援センターの病床管理部門を担当し、日々ベッドコントロールに悪戦苦闘していました。このような中、退院調整に重要な後方支援病院との連携には、地域の看護職員に「がん」、「難病」、「HIV」などの啓発、看護教育を行うことも重要な要素だと考えるようになりました。そのため、現在は滋賀県のがん拠点病院で同じプログラムによる「がん看護研修」が実施できるよう企画運営を行い、滋賀県内の看護職員のがん看護均てん化を図る教育に取り組んでいます。また、滋賀県の地域医療再生基金事業「在宅療養支援のための県内医療福祉従事者の多職種連携共通人材育成」が選択され、看護臨床教育センターでこの事業を担当させていただくことになりました。看護師、介護士、薬剤師、栄養士など多職種共通教育システムの構築と医療と介護が連携して県内の在宅医療を支えるための相互理解と情報交換ができる体制の構築を目指し、今年度から研修を開始します。平成26年3月に文部科学省大学改革推進事業は終了しましたが、引き続き看護臨床教育センターにおいて、学部と臨床そして地域との連携を深め、事業の更なる発展が望まれています。これまでの経験や知識を生かし、これまでの事業がより一層発展できるよう、看護臨床教育センターの円滑な運営に努め、看護師の質の向上と滋賀県下の在宅医療を担う医療人の育成に貢献したいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

経 歴

1982年 3月 滋賀県立短期大学看護学科卒業
1982年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院就職
1991年10月 滋賀医科大学医学部附属病院 副看護師長
1996年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院 看護師長
2004年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院 副看護部長

2006年 9月 人間総合科学大学人間科学科卒業
2010年 3月 立命館大学大学院経営管理研究科修了 (MBA)
2013年10月 滋賀医科大学医学部附属病院臨床看護教育センター講師・副看護部長兼任
2014年 4月 滋賀医科大学医学部附属病院看護臨床教育センター 准教授

キャンパス
ライフ

第39回 浜松医科大学との交流会

去る5月9・10日の2日間、浜松医科大学において第39回浜松医科大学との交流会が行われました。壮行会を行った後、塩田学長、堀池副学長他引率の教職員と約350名の学生がバスに乗り込み、出発しました。

交流会は2日間とも透き通るような快晴のもと、グラウンド、体育館、武道場等で熱戦が繰り広げられ、グラウンドでの準硬式野球の対抗戦では、堀池副学長による始球式が執り行われました。2日間の対戦成績は7勝7敗1引き分けとなり、両校引き分けとなりました。



平成26年度 第39回 滋賀医科大学 — 浜松医科大学交流会 競技結果

平成26年5月9日(金)～10日(土)

種 目		滋 賀	浜 松
硬 式 テ ニ ス	男	×	2 - 6 ○
	女	×	0 - 5 ○
準 硬 式 野 球		○	3 - 2 ×
バスケットボール	男	×	42 - 44 ○
	女	○	62 - 40 ×
バレーボール	男	×	0 - 2 ○
	女	○	3 - 1 ×
バトミントン	男	○	3 - 2 ×
	女	×	0 - 5 ○
水	泳	△	引き分け △

種 目	滋 賀	浜 松
ハ ン ド ボ ー ル	○	25 - 18 ×
ヨ ッ ト	×	57.8 - 42.7 ○
ボ ー ト	○	1 - 0 ×
空 手 道	不実施	
剣 道	×	2 - 7 ○
ゴ ル フ	○	427 - 433 ×
総 合 結 果 滋賀医科大学 7 対 7 浜松医科大学 1引き分け		

※通算(滋賀医科大学) 19勝14敗6引き分け



浜松医科大学との交流会に参加して

委員長 医学科第4学年 阿久澤 大 智

まず始めに、この交流戦を開催するにあたりご尽力いただきました先生方、職員の方々に厚く御礼申し上げます。

当初、浜松医大の学生の呼びかけにより始まったこの交流戦も、本年度で39回目となります。現在では体育会系の部活動と吹奏楽部を合わせて20の部が参加する大学をあげた年間行事の一つとなりました。このような伝統の交流戦の委員長をつとめさせてさせていただいたことを、とても誇りに思います。

今年度の交流戦は浜松医科大学で開催されました。幸運にも当日は青く抜けるような晴天に恵まれ、絶好の遠征日和となりました。滋賀医科大学から車で3時間ほど、あっという間に浜松医科大学に到着しましたが、キャンパスは開会式に向かう様々なユニフォーム姿の学生と、学生を誘導する職員の方々が行き来して交流戦の活気に満ちていました。

交流戦ではそれぞれの部が全力を出して戦いましたが、7勝7敗1引き分けで両校引き分けの結果となりました。こちらもよきライバルとして、来年こそは優勝杯を持って帰ってこれるよう頑張らなければなりません。ところで、浜松医科大学との交流戦では、

試合後の懇親会も一大イベントです。懇親会あつての交流戦といえるぐらい、こちらも賑わっていましたが、このような会を通じてさらに両校学生の親交を深めることができたと思います。この絆を大切に、将来にわたり両校出身者がお互い助け合えるような関係を築いていくことが、この交流戦の大きな目標であると思います。

今回の交流戦を行うにあたり、体育会幹部、各部長の方々には度々助けて頂きました。この場をかりて、力不足の私を助けていただいた皆様方に改めて感謝を申し上げたいと思います。この素晴らしい交流戦を通じて、両校の絆がさらに深められるよう後輩たちにも頑張ってもらいたいと思います。



準硬式野球部 主将 医学科第4学年 田 中 惇 貴

今回は浜松医科大学が主催ということで、素晴らしいおもてなしをして頂き浜松医科大学の方々には大変感謝申し上げます。

毎年交流会は開催されておりますが、浜松医科大学に行くのは隔年で久しぶりということもあり個人的にも大変楽しみにしておりました。二年前に初めて行った時を思い出しながらバスに乗っているとあっという間に浜松に着き、すぐに浜松医科大学の仲間と一年ぶりの再会を果たしました。年に一度しか顔を合わせない仲間ですが、バスが大学に到着してからの再会は久しぶりとは感じないものでした。

毎年顔を合わせる仲間と戦う試合というものは楽しさもありながら、絶対に負けたくないという独特の緊張感があります。独特の緊張感の中での試合では、普段の実力をなかなか発揮するのが難しくなることもあります。その中でいい結果を残そうとする中に普段経験できない楽しみがあります。その中で毎年試合が出来るというのはとても幸せであり、そのような場を作ってくださる先生方には感謝しかありません。

その後に行われる交流会では、お互いよく知っている2回生以上の両校の部員が会話をしている中で、新たに入学してきた一回生同士が自己紹介をしながら、

少し緊張しながらも会話を楽しんでいました。自分も一回生の時は同じだったなと思い出しながら、こうやってこの素晴らしい交流会は受け継がれていくのだなとも感じました。

今年で39回目の交流会は7勝7敗1引分ということで両校引き分けとなりました。また、二日間大きな事故無く終えることができました。この結果は、両校の各部活が普段から一生懸命部活動に取り組んでいる結果によるものだと思います。

次は西医体で浜松医科大学の仲間と再び戦うということを目指して頑張っていきたいと思います。そのためにもより一層真剣に部活動に取り組み、より良いチームワークを築いていきたいです。来年の交流会は滋賀医科大学が主催なので、今度は私たちが素晴らしいおもてなしを出来るよう頑張りたいと思います。



平成26年度 新入生研修

4月7日・8日の両日、平成26年度新入生宿泊研修が、医学科・看護学科の新入生及び引率教職員総勢185名の参加により休暇村近江八幡等にて行われました。

初日は透き通るような快晴の下、大自然の中での飯盒炊爨に始まり、午後からは、「里親学生支援について」「薬物と煙害等について」「学生のリスクマネジメントについて」「保健管理センターについて」の講演やクラス別懇談会を実施、2日目は、「滋賀と滋賀医大の魅力」「人権学習」の講演後、陶芸体験を実施しました。2日間を共に過ごした新入生はお互いに親交を深め、大学生活のスタートを切りました。

新入生研修に参加して



入学式から1週間も経たないうちに行われた研修旅行は、新入生に知り合いが皆無であった僕にとって、た

だただ不安なものでした。しかし、今振り返ってみると、同級生との交流を通じて、お互いを知ることができる良い機会であると同時に、これからの学校生活に向けて決意を新たにすることができる出発点であったと確信しています。

初日は、グループ別に行う飯盒炊爨からのスタートでした。最初は、全く知らない人同士でうまくやっていけるのかという不安もありましたが、協力しあってカレー作りをするうちに互いに打ち解けあい、仲間と協力し合う必要がある今後の学校生活に対する不安を払拭することができました。

そして、知らない人が多い中で行われたクラス別懇談会は非常に有意義なものでした。新入生がそれぞれ自己紹介をすることによって、互いの理解が深まり、これから6年間を共にする仲間との連帯感が得られました。

医学科第1学年 生 野 泰 彬

食事後の自由時間には、いろいろな人が同じ部屋に一同に集まり、まるで修学旅行時のように、ゲームや会話をして親密に交流することによって、楽しく同級生との絆を深めることができました。

2日間にわたって行われた先生の講義では、医学のことだけでなく、滋賀県や滋賀医科大学のことについても学ぶことができました。医学に携わってきた先生の自らの過去に関する講義は、非常に興味深いもので、自分の未来の医師像を想像する指標となりました。また、滋賀県や滋賀医大に関する講義は、滋賀県民である僕にとっても知らないことばかりで、非常に勉強になりました。

研修旅行を終えて、多くの人と友達になることができ、また自分の理想の医師像に向かって、充実した大学生活を送ろうと決心することができました。これから数々の困難に直面すると思いますが、その時は仲間と共に協力して、乗り越えていこうという覚悟をもつことができました。



新入生研修に参加して

入学し僅か数日しか経ってない中で行われた研修合宿は、快晴からの始まりでした。名簿が近く、漸く話せるようになった友人と行動しながら休暇村近江八幡へ。持ち込んだお菓子を頬張りながら、何気なく車窓を覗き込めば、滋賀県民である私でも見惚れてしまうほど美しい琵琶湖を横目にバスは穏やかに発車しました。後にそこはさざなみ街道というところを知り、その粋な計らいに思わず友人と笑ったのを覚えています。

到着後、さっそく飯盒炊爨に取り掛かりました。初めて話した人たちとかわるがわる火をおこしたり、野菜を切ったり。なかなか安定しない火に、初対面の緊張になんて構ってられませんでした。最終出来上がったカレーはなんの変哲もない普通のカレーだったのに、やけに美味しかったです。

午後から翌日にかけて行われた各種講義では大学生として、改めて自覚を迫られたものになりました。医学について、職業の選択の幅、日常生活に関わること、そして滋賀県について——責任を持ち、自覚のある学生であろうと心から思いました。一方滋賀県についての講義ではよく知っていると思っていた滋賀県

医学科第1学年 藤岡 彩夏

の魅力を再度実感できました。

クラス別懇談会では担任の先生がとても面白かった上、誰もがノリが良かったため、ただ自己紹介をただけなのにたいへん盛り上がりしました。個々人とはあまりたくさん話せなかったのですが、その人となりや考えを少しずつ知ることができて本当に良かったです。続く夕食・自由時間では懇談会の暖かな雰囲気を保ったまま、部屋を渡り、学科・男女の壁なく交流できました。今でも彼らを中心に交流が広がっているように思えます。最終イベントの陶芸はごちない手つきで抹茶茶碗を作りました。自信はありませんが、長く使えるものであることを祈っています。

2日間とも穏やかな天気の下、研修は大事なく過ごせたように思います。研修を通して学べたもの、得られた友人を大切に、皆で一つの目標に向かいつつ、これからの大学生活を謳歌したいです。



看護学科第1学年 先田 仁美

した。陶芸は初めてで最初は苦労しましたが、気づけば熱中していて満足のいく作品を作ることができました。完成品がとても楽しみでした。

2日間の講義の中では「滋賀と滋賀医大の魅力」が最も印象的です。滋賀について何も知らないまま入学したので、紹介して下さった場所や施設は全てが魅力的でした。そして滋賀医大には滋賀医大出身の先生が多く在籍しているので心強いと感じました。

今回の研修合宿では想像以上に思い出をたくさん作ることができ、大学生としての自覚や4年間の目標を持つことができました。今回得たことを糧に理想的な医療者に成長できるように4年間を送りたいです。



私は滋賀県出身ではないので滋賀についてあまり知らず人見知りでもあったため不安も多かったのですが、スケジュールを見て滋賀の魅力を知ることができ、また、友達を作れる絶好の機会だと思い前日からとても楽しみにしていました。

当日は天候に恵まれ、行きのバスでは景色の良い琵琶湖を眺めることができました。休暇村でもロビーから眺める桜と琵琶湖がとても美しかったです。飯盒炊爨では医学科、編入生と合同でカレーを作るということで少し緊張していましたが、火起こしやカレーの味に苦戦しながら協力し合うことで、徐々に壁がなくなりました。いくつかの講義の後の懇談会では看護学科全員の個性豊かな自己紹介が行われ、それぞれの出身地や趣味を知り、私以外の人も緊張がほぐれて和気あいあいと話すことができました。また、先生方もユニークで興味深い自己紹介をして下さったので、今後4年間、充実した大学生活が送れるだろうと思いました。2日目の午後には陶芸体験をし



新入生研修に参加して

看護学科第1学年 中 川 幹 人

大学に入学して、3日目にしての研修。予定を見ればあまり面白くなさそう……。楽しく過ごすことができるだろうか、そんな不安とともに研修へ。

バスに乗って、さあ、出発！休暇村近江八幡に到着した後は、すぐに飯盒炊爨。絶好の研修日和、桜の花もきれいに咲いていて、琵琶湖の対岸を望める、休暇村のそんな風景に心地よさと安心を覚えました。カレー作りでは、火を強める役に必死になっていましたが、グループで協力して作ったカレーは、特別美味しく、医学科、看護学科、双方の人たちと交流ができ、楽しい時間となりました。

その後の講義の時間は、眠るまいと思いつながら聞いていましたが、それは美味しい食事と暖かかった日差しのせい。やはり何度か舟をこいでしまったのですが、今後の自分の人生に関わる話や、看護学生となるこれからの心構えの話、大切なことを教えてもらえ、とても良い機会でした。そして、懇談会での自己紹介で、これから仲間となる人たちはそれぞれ個性豊かな人たちであると知りました。

その夜、自分は再受験生の集まるお部屋へ。

自分は18ながらも同期に、人生に厚みのある医学科の方たちのお話を聞けて、さらに親しくなることもでき、年や学科が違うにも関わらず、それを感じさせない交流ができるようになって良かったと思います。

2日目、休暇村を出ると、バスの中から休暇村の職員の方たちが手を振ってくださっているのが見えました。陶芸の里では、普段できないことなので、綺麗な湯飲みを作りたいと意気込んだ結果、何かよくわからないものを作ってしまった。焼きあがって返ってきた時、自分が喜ぶのか落ち込むのかそれが楽しみ(?)です。

最初に不安を感じていたことなどすっかり忘れ、とても楽しく、色々な事が体験できた新入生研修、これから自分がどんな大学生となり、どんな人生を歩むのか、改めて考える貴重な機会となりました。



看護学科第3年次編入生 今 井 拓 男

私は、新入生の中でも大分と年齢を重ねています。編入生でもあり男性でもあり上手くやっていけるだろうか？と入学前から不安を感じ緊張していました。休暇村近江八幡に到着し、前日までの冬型の気候が嘘のように快晴で、目の当たりにした琵琶湖は大変美しいものでした。そして、飯盒炊爨では、同じ班になったメンバーと、じゃがいもがまだ煮えない中、小さくなっていく火を前に皆で相談しながらのカレー作りは大変楽しいものでした。そして、いつの間にか感じていた不安もなくなりました。

午後から講演を聞かせていただき、懇談会ではみんなの素敵な自己紹介で和みました。フリータイムには同部屋の学生と話し、また早朝には綺麗な空気の中、朝の光輝く琵琶湖を背に集まった学生と話し有意義な時間を過ごしました。研修2日目は滋賀の魅力を話して下さいました。近江商人の『三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)』の心得は社会

貢献をしていくために必要と感じ、また心の中にあった学生生活をしていく上での焦りが、瀬田の唐橋の『急がば回れ』の話を聞き、自身にあった迷いを払拭させてもらいました。とても心に染みる講演を聞かせて頂きました。

最後は水色がとても綺麗な色調の水蒸焼で「陶芸の里」に移動しての陶芸体験でした。最初に頭に描いていた形とは程遠い作品ではありましたが、焼き上がりが楽しみです。

今回、研修を通して出会った仲間を大切に、人の繋がりを大切にしていきたいと思っています。そして、2年間、おそらく「あっ」という間に時は過ぎてしまうのだと思います。もったいない時間は過ごさずに信念を持って全力で勉学に勤しんでいきたいと思っています。貴重な研修を開催していただき、ありがとうございました。



リーダース研修

本学では課外活動を有意義に発展させ、リーダーとしての自覚と認識を高めると共に、課外活動団体の相互理解を深めることを目的として、毎年、リーダース研修を開催しています。

平成25年度は去る3月6日(木)、各課外活動団体の代表者(キャプテン)38名の参加の下、クリエイティブモチベーションセンターにおいて実施されました。

初めに服部副学長(当時)から開講の挨拶があり、引き続き、救急・集中治療部の浜本学内講師による「救急蘇生等講習(AED講習)」では、実際にAED機器を使った講習が行われました。その後、各班に分かれ、課外活動に対する日頃の悩みや問題点等について討議したのち、病理学講座(分子診断病理学)の向所准教授より「論語に学ぶリーダーの心得」と題して講演があるなど、充実した内容の半日となりました。

リーダース研修に参加して

文化会長 兼 軽音楽部部长 医学科第4学年 石川翔也

今年も毎年恒例のリーダース研修が体育会、文化会の各部活動の代表者によって行われました。救急・集中治療部の浜本先生による救急蘇生講習、班別での討議、向所准教授による講演、そして交流会と非常に濃い一日となりました。

救急蘇生講習では、浜本先生にAEDを用いた蘇生法を非常にわかりやすく丁寧に指導していただきました。単に蘇生法だけでなく、部員にもしものことがあった場合、部の責任者として、また、医学生として、どうすべきなのかという心構えも教えていただきました。

班別の討議では、部活動の問題点や部を取りまく環境、部活動の代表者として常日頃から抱えている疑問などを、同じ部活動をまとめる立場にある人たちと話し合いました。よりよい部活動にし、よりよいリーダーになる



にはどうすればよいのかを考える有意義な場になりました。

向所准教授には「論語に学ぶリーダーの心得」という講義をしていただきました。この講義で教えていただいたことは、各部活動のリーダーという現在の立場だけではなく、この先医療者となった際にも成長するためには欠かせないものだと思います。

今回のリーダース研修は、各部活動の代表者の意識が高まり、部活動の発展に繋がる非常に実りのある研修になりました。この経験を生かして、リーダーとして更なる成長を得ることができればと思います。この度、研修に協力してくださった先生方、関係者の皆様には文化会会長、軽音楽部部长として心から御礼を申し上げます。



医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

第108回医師、第100回保健師、第97回助産師、第103回看護師の各国家試験の合格発表が平成26年3月に行われ、滋賀医科大学の合格状況は次のとおりでした。助産師の新卒者の合格率は、4年連続で100%でした。なお、いずれの合格率も全国平均を上回る結果となりました。

第108回 医師国家試験

平成26年2月8日(土)・9日(日)・10日(月)実施

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	95名	95名	88名	92.6%	全国 受験者 8,632名 合格者 7,820名 合格率 90.6%
既卒者		10名	8名	80.0%	
計		105名	96名	91.4%	

参考 前回 第107回医師国家試験の結果

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	109名	108名	101名	93.5%	全国 受験者 8,569名 合格者 7,696名 合格率 89.8%
既卒者		4名	3名	75.0%	
計		112名	104名	92.9%	

第100回 保健師国家試験

平成26年2月14日(金)実施

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	68名	67名	66名	98.5%	合格率(全国) 86.5%
既卒者		0名	0名	—	
計		67名	66名	98.5%	

参考 前回 第99回 保健師国家試験

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	65名	65名	65名	100.0%	合格率(全国) 96.0%
既卒者		2名	1名	50.0%	
計		67名	66名	98.5%	

第97回 助産師国家試験

平成26年2月13日(木)実施

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	8名	8名	100.0%	合格率(全国) 96.9%
既卒者	0名	0名	—	
計	8名	8名	100.0%	

参考 前回 第96回 助産師国家試験

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	8名	8名	100.0%	合格率(全国) 98.1%
既卒者	0名	0名	—	
計	8名	8名	100.0%	

第103回 看護師国家試験

平成26年2月16日(日)実施

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	57名	56名	98.2%	合格率(全国) 89.8%
既卒者	3名	3名	100.0%	
計	60名	59名	98.3%	

(注) 新卒者中10名は3年次編入学者で、既に合格済。

参考 前回 第102回 看護師国家試験

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	55名	52名	94.5%	合格率(全国) 88.8%
既卒者	1名	0名	0.0%	
計	56名	52名	92.9%	

卒業生からのメッセージ

厚生労働省医政局看護課
(看護学科第10期生)

松 野 文 恵

私は滋賀医科大学看護学科を卒業後、附属病院に4年間勤務し、その後2年間イギリスに留学、昨年秋に帰国し、現在は厚生労働省にて看護系技官として働いています。

祖母が助産師であったことも影響し、人と深く関わることができ、また女性として一生働ける看護師という仕事に魅力を感じ滋賀医科大学に入学、その後就職しました。手術室に4年間勤務しましたが、最初の1年間はすべてが怒涛のようだったことを今でも鮮明に覚えています。手術室という緊迫した現場で、学ぶことの多さや自分の持つ責任の大きさに圧倒されながらも、先輩方や同期に支えられながら日々をこなしていました。

緊張感ある手術室での職務は大変やりがいのあるものでしたが、生活習慣病が原因で手術を必要とする多くの患者様に接することも多く、患者様の心身・財政的負担について考えさせられることも多くありました。病院だけでなく地域・国レベルの取り組みで人々の健康をどう維持・増進できるかという保健医療政策に対しての興味が強くなっていきました。

4年間の勤務の後、公衆衛生の視点と諸外国の



医療政策を勉強してみたいとの思いを強くし、大学院留学を決意しました。私は小学校5年生の頃、イギリスに1年間在住しており、いつかイギリスでもう一度生活してみたいと思っていたというのも理由の一つです。1年間イギリスのエジンバラにある語学学校で英語の勉強（半分近くの時間は旅行などの遊びに費やされましたが...）の後、エジンバラ大学修士課程の国際保健・公共政策コースに入学しました。

大学院生活は予想していた以上に大変なものでしたが（英語の聞き取りが難しい、議論に中々参戦できない、英語でのプレゼンが...等々）、アメリカ、カナダ、アフリカ諸国からも多くの留学生が集まるイギリスでの学びは、私の狭かった見識を大いに広げてくれました。また、保健医療・福祉政策の仕組みやそれらが国民の健康に与える影響を学び、他国との比較を通して改めて日本の保健医療政策・制度について考える機会を得ることとなりました。

日本の公的医療保険制度をテーマにした修士

看護師時代の写真



手術の介助中。
手前で背中を向けているのが筆者

論文を執筆する中で、世界でも最も優れたレベルにあると評価されている日本の医療制度に誇りを持つと同時に、高齢化社会、医療費の増大、財源不足による現在の医療・福祉・介護制度の持続性への懸念や、その日本の保健医療を現場で支えている看護師・保健師に対する育成・教育・待遇についての諸問題に対して行政の立場から関わりたいと思うようになり、帰国後に厚生労働省の看護系技官に応募し、この4月より医政局の看護課で看護教育担当として働いています。初めてのデスクワークや法律の関わる業務にいっぱいいっぱいですが、職場の皆さんに教えてもらいつつ、日々をこなしている状況です。

今改めて思うのは、私のこれまでの日々は、本当に滋賀医科大学でのご縁・経験に支えられてきたということです。語学学校や大学院生活の中でも、4年間看護師として働いた経験はクラスメイトとの活発な議論に役立ちましたし、帰国後もまた、母校でのご縁に支えられて厚生労働省へと入省する機会を得ることができました。

看護師という仕事は本当に様々な場で活躍することのできる職業だと思います。今、私は行政の場で働いていますが、後輩の皆さんも自分の興味のあること、自分を活かせる場所をたくさんの選択肢の中から見つけ出せるよう、今の学生生活を楽しみ、滋賀医科大学での学びや仲間・先生方との縁を大切に、将来の糧にしていただけたらと思います。

留学中の写真



グラスゴーでオリンピックの
日本対スペインの試合を観戦

プロフィール

看護学科第10期生

本学看護学科卒業後、附属病院手術部にて4年間勤務。

その後2年間の英国での語学学校・大学院留学を経て、今春より厚生労働省医政局看護課に勤務。

新入生
歓迎企画

本学教職員が薦める この本2014

新入生、新規採用職員の皆さん、滋賀医大へようこそ！
図書館では、良き医療人を目指し、これから本学で学ばれる
皆さんのために、8名の先生方から図書を推薦いただき
展示する企画を開催しました。(2014年4月3日～5月23日)
展示図書は、すべて図書館で所蔵しています。
在学生・在職者の方もぜひご覧ください。



▶医療大転換：日本のプライマリ・ケア革命

(葛西龍樹 著／筑摩書房)

厚生労働省は「総合診療専門医」の導入を決め、諸外国で「家庭医」と呼ばれている医師を多く育成して、大病院と役割分担をしていくような医療システムの方向性を打ち出している。これは、現在の日本の医療体制は、「家庭医」の役割を十分に果たせる医師が不足しているために、多くの患者が大病院に集中し、勤務医が疲弊するとともに医療費の高騰を招いているためである。日本の医療崩壊を防ぐために、どのような医療体制を目指せばいいのか、カナダで本来の「家庭医」のトレーニングを受け、現在、福島県立医科大学の地域・家庭医療学講座の主任教授として、教育と実践に取り組んでいる葛西氏の提言である。これからの日本の医療の変革を考える上で、読んでおきたい小冊である。



図書館長
マルチメディアセンター長
村田喜代史 教授
放射線医学／放射線科

▶Pioneers of cardiac surgery

(William S. Stoney 著／Vanderbilt University Press)

本著書はタイトルの通りいかに心臓外科という分野が誕生し、発達してきたかということを解説した本である。しかし、これは単なる狭い分野の治療法の説明といった退屈な書物ではない。20世紀初頭に突如として現れた心臓疾患の直達治療法、それが心臓外科であるが、そのドラマティックな誕生と発達の歴史を極めてわかり易く物語っている。最初の60ページに心臓外科の発達の概略があり、後のチャプターは、まさに一人一人の心臓外科のパイオニアが如何に困難を乗り越え、不可能を可能にしたか、その生きざまに迫る読み物で、十分楽しめる内容である。これから医者道を歩む君たちにぜひ一読していただきたい私の一押し。



浅井徹 教授
心臓血管・呼吸器外科



平田多佳子 教授
生物学

▶ 生きがいについて

(神谷美恵子 著／みすず書房)

著者の神谷美恵子氏は文学の研究から医学部へ進路を変え、瀬戸内海の長島愛生園でハンセン病患者の診療に携わった精神科医。19歳のとき多摩全生園を訪れる機会があり、ハンセン病患者の姿を見て自分の進むべき道がはっきりしたとのちに語っている。私が神谷美恵子氏の著書を初めて手にしたのは大学生のとき。著作集第1巻として刊行されていた『生きがいについて』である。それ以来、彼女のいくつかの著書とともにずっと傍においている。生きがいとはどのようなものが、自己の存在理由は何が、本質的に生きることはどういうことなのか考えさせられる。そして何よりも、透き通るような美しい文章が心に染み入る。

▶ 医者は現場でどう考えるか

(ジェローム・グループマン 著；美沢恵子 訳／石風社)

ハーバード大学医学部の教授がなぜ誤診が起きるのか書いた本。十数年前に私が留学していた Beth Israel Deaconess Medical Center に著者の Dr. Groopman の研究室があり、研究分野が近いこともあり彼の研究論文はよく読んでいたのだが、一般書の執筆活動もされていることを最近知った。誤診は「技術的な問題」ではなく「医師の思考法の欠陥」にあるという。全医学生、研修医に読んでほしい。

▶ 科学

(宮崎市定 著／中央公論社)

たまには歴史の本もいいのではないだろうか。歴史に疎い私が楽しく読めた一冊。「科学」は中国の官吏登用試験で、隋から清の時代まで、1300年余りも続いた史上最難関の過酷な試験制度である。受験生のエピソードがたくさん交えてあってどんどん読み進むことができる。不正防止のしくみも興味深い。入学試験に無事合格してほっとしている新入生の皆さんを待ち構えているのは、卒業するまで延々と続く数々の試験である。しかし、科学のことを考えれば医学部の試験なんてたいしたことないなああと心底思える。

▶ The happiness advantage : the seven principles of positive psychology that fuel success and performance at work

(Shawn Achor 著／Crown business)

物事に対する見方をポジティブな方向へ変えることが成功の鍵で、そのために個人が取り組むことができる実践方法が書かれています。タイトルをみると懐疑になる人もいるかもしれませんが、著者はハーバード大学出身の positive psychology を専門とする研究者です。現在はKPMGやSamsung等世界各国の大企業のCEOや従業員へワークショップを開いているそうです。努力をして成功すれば幸せになれるという生き方の構図は幻想で、幸せだからこそ効率性と創造力が高まり成功へつながる、という逆の流れを多くの研究成果を次々と繰り出し説明します。学生としてだけでなく学生の相談員として12年間もハーバードの寮に住み続けた著者の温かい人柄が偲ばれ説得力があります。皆さんは、滋賀医科大学に入ってほっとすると思いきや、競争はまだまだ続くと気が付いて、途方に暮れたりあるいはうんざりすることもあるかと思います。そんな時、この本は役に立つかもしれません。洋書ですが、皆さんの受験対策で培った英語力があればすぐに読めてしまうと思います。



川畑摩紀枝 教授
公衆衛生看護学



小島秀人 教授

再生・修復医学

▶二十歳の原点

(高野悦子 著／新潮社)

学生運動が盛んであった昭和40年代後半の大学生の苦悩を綴った日記。作者は「自分の心に正直に生きてゆきたい」と二十歳になった自分に言い聞かせます。しかし、現実の社会は、自らの誓いの原点とはほど遠く、未来に絶望し、やがて安らかな旅に出たいと自殺を選ぶことになります。しかし、もし作者が今日まで生きていたら、きっとこう説いてくれるでしょう。「人生はすばらしいもので、しっかり生きてみないと解らない」と。社会の不条理にまっすぐ立ち向かう青春の姿の中に、現代を生き抜くためのヒントがあるように思います。

▶羅漢：仏と人との間

(梅原猛 文；井上博道 写真／淡交新社)

哲学者が奇妙な人間像の中に見た究極の仏心。釈尊の教えは「とらわれない心である」ことを大変わかりやすく解説してくれる。私は高校時代に「人は何のために生きるのか」という答えのない疑問の谷底に落ち込み、這い上がれなくなってしまった。当然、高校では受験勉強など手につかず、予備校へ行って仕方なく受験勉強をして、やっと我が大学に拾ってもらった。それでも、心は崖の谷底状態で「存在しない」答えを探していた。ある日、図書館でこの本に出会った。そして、とある羅漢さんの中に自分と同じ「悲しみと笑い」を見つけ、答えを探すのがばかばかしくなった。「答えはない」という地上に出られた瞬間だったような気がする。……残念ながらこの本は絶版です。

▶ホンダ神話1：本田宗一郎と藤沢武夫／ホンダ神話2：合従連衡の狭間で

(佐藤正明 著／文藝春秋)

本書は、戦後の混乱期に本田宗一郎氏と藤沢武夫氏の二人のカリスマ的創業者によって零細町工場から一流企業に育て上げられたホンダが、両氏の引退後、時代と共に次第に迷走していく様子を克明に描いています。日本や欧米の政策、国民の生活や考え方の変化、国際的な経済情勢などの時代背景と自動車メーカーの盛衰との関係がわかりやすく描写されているため、政治や経済に疎くてもおもしろく読めます。企業成長を左右する経営者の考え方や人柄、企業と社会との対話の重要性をとおり、社会人としての生き方を考えさせられる内容ですが、バイクや車好きにはたまらないホンダ車開発やレース参戦に至る裏話も盛りだくさんです。

▶ポアンカレ予想を解いた数学者

(ドナル・オシア 著；糸川洋 訳／日経BP社)

ポアンカレ予想って何？紀元前からの幾何学の歴史を辿りながら解説していく本書は、高校程度の数学（文系）の知識があれば十分理解できる内容になっています。幾何学が発展していく様を直観的に追っていけるため、知的好奇心や科学的探究心がそそられます。また、歴史上著名な数学者の数奇な人生、手紙のやりとりから窺える数学者同士の嫉妬心や優越感など、科学者の人間臭さを浮き彫りにしている点がとても面白い。ポアンカレ予想を解きながらフィールズ賞を辞退したペレルマンのことは簡単に触れている程度なので、その人となりについて謎は深まりますが、数学嫌いでも十分楽しめる傑作です。



宇田川潤 教授

生体機能形態学



長尾大志 講師
呼吸器内科

▶レジデントのためのやさしい呼吸器教室： ベストティーチャーに教わる全27章

(長尾大志 著／日本医事新報社)

滋賀医科大学には永らく呼吸器内科医が不在であったこともあり、呼吸器に関する教育は満足できるものではなかったようです。そのために滋賀県全体として呼吸器内科医が不在であり、一般医家の呼吸器に関する知識も不足していました。そのような状況を打破するために滋賀に派遣されて以来、学生さん、若手医師の指導に工夫を重ねてきた集大成が書籍になりました。若手医師のみならず学生さん、看護師さん、コメディカルの方々、医療事務の方にも「面白い」「読みやすい」と好評ですので、入学したばかりの皆さんが医学、医療、臨床で行われていることのエッセンス、理屈を知るには好適の書だと（我ながら）思います。

▶ロボット：(R.U.R.)

(チャペック 作；千野栄一 訳／岩波書店)

本作品は、今から約100年前にロボットという言葉の世界で初めて使用した戯曲作品です。内容を簡単にまとめますと、人工物の自律性を起点に知性や生命の定義を問いかけて、最後には投げっ放しジャーマンで終劇という、昨今の銜学趣味なサイバー系サブカル作品に多々ありがちなエッセンスを凝縮したようなものです。とりあえず「人間万歳！生命は大事！」と無思慮に思い込んでいる（or思い込んでいたい）方は、むしろ中途半端にモノを考えるよりは現状維持がいいと思いますので読まなくていいかもですが、仮初にも読むのであれば、知性と生命という概念をまず自分なりにそれぞれ定義してから、読んでみるといいかもしれません。



小島隆次 准教授
心理学

▶エモーショナル・デザイン：微笑を誘うモノたちのために

(ドナルド・A・ノーマン 著；岡本明ほか 訳／新曜社)

本書は、様々な工業製品を人にとって使いやすく魅力的なものとするには、どうすればいいのかということについて認知科学的知見に基づき一般向けに論じています。本書では、ユーザに愛される製品には、ユーザの目的に叶う機能美だけでなく、初見でユーザの情動に訴える外的魅力とユーザの知性に訴える内省的魅力が必要だと述べられています。で、本書を読まれる方は、“工業製品”を“医療サービス提供者”に、“ユーザ”を“医療サービス享受者”に、置き換えて読むと素敵かもしれません。あるいは「他者世界において自分は工業製品に過ぎない」という前提で、他者というユーザのために自分をデザインする、として読めばコミュニケーション論として有用かもしれません。

▶Head first データ解析：頭とからだで覚えるデータ解析の基本

(Michael Milton 著；木下哲也 訳／オライリー・ジャパン)

なんでしょう、「うわぁ、なんか意識高い系」の大学2回生くらいが読みそうな、胡散臭いハウツー本を紹介するんですか？という突っ込みもあるかもしれませんが、確かにそんな感じです。実際、データ解析の基本と銘打っていますが、こんなの読んだくらいではデータ解析の基本は身に付きません。この本は「日常出くわしそうな類のデータに対して、どういう態度で臨むようにしたらいいか」に関する最低限のTips集のつもりで軽く読んで下さい。ちなみに、本書に掲載されている問題の解答例やQ&Aのやりとりは、「わざと読者を懐疑的にさせようとしているのか？」と思うくらいひどいので、参考にしないでいいです。

ご協力いただいた先生方、ありがとうございました！

アジア疫学 研究センター 紹介

アジアのトップリーダーとして活躍する 非感染性疾患（NCD）対策の専門家育成を目指して



文部科学省・博士課程教育リーディングプログラム（オンリーワン型）
アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト
Leading Graduate Program for Reducing the Burden of Non-communicable Disease
(NCD) in the Asian Pacific Region

アジア疫学研究センター 特任助教
久松 隆史

今回は、文部科学省・博士課程教育リーディングプログラム（オンリーワン型）として昨年度採択されました、滋賀医科大学「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」（プログラムコーディネーター：三浦克之教授）をご紹介します。

博士課程教育リーディングプログラム 「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」とは

非感染性疾患（Non-Communicable Disease、以下NCD）は先進国のみならず世界規模で急増しており、21世紀の健康問題の核心的課題として位置づけられています。NCDはがん、脳心血管疾患、およびその危険因子である糖尿病・高血圧・脂質異常症など生活習慣病の増加という形で顕在化し、アジア新興国において特に深刻な健康問題となっています。そのような現在、アジア太平洋州における健康問題の解決と健康寿命の延伸を実現するためのグローバルリーダー人材の育成が求められています。

本プログラムでは、滋賀医科大学における充実した生活習慣病疫学研究の基盤を最大限に活用した教育を通じ、NCDに関する医学的知識、疫学方法論をはじめとした高度な科学技術、アジアの公衆衛生改善に対する構想力を兼ね備えた、産学官を横断する人的ネットワークをもつ、バランスのとれたリーダーを養成します。これにより、国内外の産学官の広い分野においてアジア太平洋州のトップリーダーとして活躍するNCD対策の専門家を育成します。

本プログラムの特色

1. 国内唯一のNCD疫学の国際教育研究拠点（アジア疫学研究センター：CERA）を中核にすえた教育研究指導

我が国の生活習慣病疫学研究において中心的な役割を担ってきた本学が有する大規模NCD疫学データベース、およびアジア疫学研究センターという教育研究施設を最大限に活用した独創的かつ世界レベルの大学院教育・研究指導を実施します。

2. 英語コミュニケーションを重視したカリキュラム

国際的に著名な疫学研究者・生物統計家の雇用または短期間招聘により、教育・研究指導の国際化を図ることで、英語ディベートに代表される、論理的議論を英語でできるグローバルリーダーを養成します。

3. 国際的センスを持つ「行動するトップリーダー」の育成

本学が有する多彩なグローバルネットワークを活用し、欧米・アジア等の提携校・研究機関・行政機関・健康関連企業における「武者修行」をプログラムの一環として組み入れます。

4. 単科医科大学のもつ機動性を生かした教育体制

大学院教育システムの再構築を行い、先端医学研究者コースに「アジアNCD超克プロジェクト」を新設し、学内の教育資源、研究資源を重点的に投入して、全学的な動員体制のもと、機動的かつ横断的に各専門分野の教育を行います。

5. 経済面も含め修学に集中できる環境およびキャリアパス支援

本プログラムでは修学、及び研究に専念できるよう、奨励金制度を設けます。また、海外研修費用の補助や研究費の助成も行います。昨今、行政機関・民間企業においても疫学的エビデンスに精通したリーダー及び研究職が求められており、キャリアパス支援室を設立し、プログラム修了後のキャリアパス確立を積極的にサポートします。

本学アジア疫学研究センターをはじめとする充実した生活習慣病疫学研究の基盤を活用した教育を通じ、以下を兼ね備えたリーダーを養成



プログラムが育成するリーダー像

本プログラムでは本年度（平成26年度）の秋入学から博士課程学生を受け入れる予定となっています。本プログラムにご興味ある方は、ホームページをぜひご覧ください。

<http://www.shiga-med.ac.jp/leading/>

滋賀医科大学ホームページ、左のリンク集からもアクセス可能

「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」カリキュラム

日本およびアジア新興国からの優秀な人材の確保

医療従事者（医師・保健師・栄養士など）、保健・医療セクタの行政官・NGO、健康・医療関連企業

希望者に奨学金補助

学生寮提供などの生活支援

1 年次

医学基礎知識の修養

NCD 臨床クラスタ教員による非感染性疾患の成因、診断、治療、予防に関する英語を中心とする講義

疫学・生物統計学の修養

公衆衛生・医学統計・NCD 疫学クラスタ教員による英語を中心とする講義・演習

少人数グループワーク

日本人 2、留学生 1 をペアとし、研究倫理、異文化理解、コミュニケーション向上を目的とした、1 年間の英語グループワーク

2 年次

研究計画の推敲

国際水準の博士論文をめざし、1 年間かけて研究計画の推敲を指導教員とともに進行

海外研究機関短期研修

欧米およびアジアの大学・研究機関（Pittsburgh, Hawaii, London, Northwestern, Sydney, Bangladesh Vietnam 等）での研究技法習得

Presentation and Debates

英語による発表技法を学ぶとともに、論理的な議論（ディベート）ができるような国際人を育てる

3, 4 年次

博士論文執筆

欧米一流雑誌 3 編の掲載を目標にして、それらをまとめた博士論文の作成を行う

海外学会等での武者修行

国際学会発表を複数回経験、海外研究機関、行政機関、民間企業での研修などにより、現場経験を積む

アジア・フィールドワーク

本学のアジア提携校を基地としてアジアの公衆衛生現場に滞在し、研究テーマ探索と研究遂行

修了後

海外ネットワークを駆使した世界基準の学位審査による博士号取得

滋賀医大アジア疫学研究センター主催の国際シンポジウムと連動した学位論文審査

アジア NCD 超克を共通の使命とする行動するリーダーをアジア諸国に輩出

大学・研究機関、行政機関・NGO、企業・医療機関など

**国立病院機構
東近江総合医療
センターだより****「国立病院機構東近江総合医療センター」の
近況紹介**

滋賀医科大学総合外科学講座 教授

来 見 良 誠

(東近江総合医療センター 副院長)

沿 革

東近江総合医療センターは、昭和16年2月「**八日市陸軍飛行連隊病院**」として創設されました。昭和20年12月には、厚生省に移管され、「**国立八日市病院**」と名称変更いたしました。滋賀医大附属病院が開院した時には、病床数が200床で、すでに開設後37年が経過した歴史のある病院です。平成12年12月には国立病院の統廃合により、病床数250床に増床され、名称を「**国立滋賀病院**」といたしました。現在でも近隣の住民の間では、“国立”の愛称で呼ばれています。平成16年4月には独立行政法人となり、「**国立病院機構滋賀病院**」となりました。臨床研修システムの変更により、医師の大量引き上げがあり、平成22年4月には病床数を120床に縮小することになりました。地域医療再生を旗印として国・県・東近江市・国立病院機構・滋賀医科大学が協力し、平成22年6月から再生計画が開始され、東近江市内の医療機関の再編、大学より人材派遣、国立病院機構による支援が綿密な計画のもと実行されました。平成25年4月には320床に増床するとともに「**国立病院機構東近江総合医療センター**」と名称変更し、東近江市の中核病院と位置づけられるよ

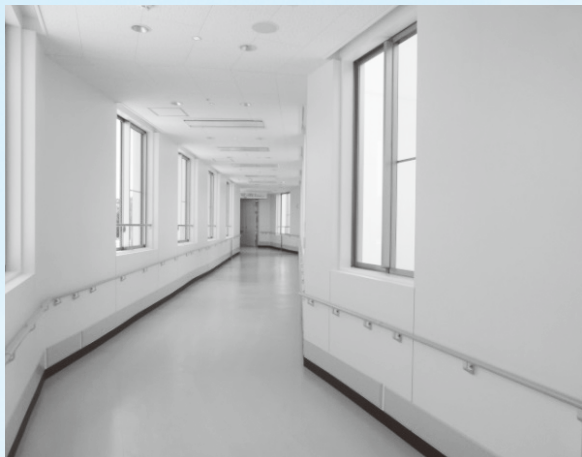


うになりました。

診療体制の強化

診療科目は25診療科（総合内科、糖尿病・内分泌内科、神経内科、精神科、呼吸器内科、消化器内科、血液内科、循環器内科、小児科、放射線科、病理診断科、救急科、外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、泌尿器科、産婦人科、皮膚科、心臓血管外科、麻酔科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔





外科、リハビリテーション科)があり、一部の診療科を除くすべての診療科で常勤医師が対応し、現在は常勤医師42名のほかに非常勤医師15名、前期研修医5名、後期研修医2名で診療にあたっています。外科系診療科の充実に伴い麻酔科の強化が最優先事項となっています。外来改修工事においては、救急診察室の拡充、感染診察室の設置および泌尿器検査室の新設を行いました。

学生実習

平成24年度より開始した学生実習も今年度で3年目になります。医学部学生は全員2週間連続で当院各科で実習を行っています。現在までに平成24年度93名、平成25年度107名の学生実習を行い、多数の学生から高い評価を受けています。平成26年度は、112名受け入れ予定で、現在までにすでに22名が当院で実習を行っています。

臨床研修

臨床研修は、滋賀医科大学の協力型研修指定病院として実施しており、今年度より前期研修2年目の医師が常時3～5名ずつローテーションすることになりました。さらに次年度以降、管理型

研修指定病院として2名の研修医の募集を開始いたしました。6月1日に北九州市において実施された医学生・初期研修医向け研修病院説明会にも参加し、積極的に臨床研修に取り組んでいます。特に総合医の育成を目的として行っている総合内科の朝のカンファレンスは、学生の間でも大きな話題になっています。

施設整備状況

設計から完成まで約3年間かけた新病棟建設・外来施設改修・駐車場の整備が本年6月に終了いたしました。新病棟は昨年4月には完成していましたが、外来棟との間は仮設通路で連結しており、本年5月末に1・2階部分がそれぞれ結合され院内のアクセスが大きく改善されました。私の一日の院内での平均歩数が、連結前には約5,000歩でしたが、連結通路の完成により3,500歩に大きく短縮されました。30メートルの連結橋は昭和と平成をつなぐ架け橋のような印象を受けます。

駐車場は、工事中は工事車両の通路になっていたため、工事の最終段階で整備する予定でした。これについても本年5月に完成し、同時に駐車場を有効利用できるようロボットゲートを設

置して管理することにいたしました。これによって、病院と無関係の方の駐車が一掃されることになりました。ハード面での整備がほぼ終了し

たので、今後はソフト面のさらなる充実を図る予定です。

呼吸器内科の紹介



滋賀医科大学
総合内科学講座 助教
(国立病院機構
東近江総合医療センター
呼吸器内科医長)

小 熊 哲 也

(医学科17期生・平成9年卒)

平成26年4月より東近江総合医療センターに赴任しました呼吸器内科の小熊哲也と申します。東近江総合医療センターでは平成23年から呼吸器内科が1名で常勤しておりましたが、ようやく本年から2人体制となります。これまで各科の先生方に診て頂いていた間質性肺炎や喘息重責発作、COPD急性増悪、肺結核などできるだけ診てゆきたいと考えています。

もちろん当院の特徴を生かして専門領域以外の知識も吸収したいと考えています。

当院の内科の特徴は何と言っても朝のカンファレンスです。前日の入院症例、救急受診症例を毎日検討するのですが、疑問点について即座に専門領域の先生からアドバイスを受けられ、また、めずらしい症例から自科ではあまり診ないcommon diseaseの新しい治療、考え方まで実に多くの事を学ばせていただいています。時に

は自分の患者の見落としを指摘されたりすることもあり、自分にとっても患者さんにとっても大変良いシステムだと思います。

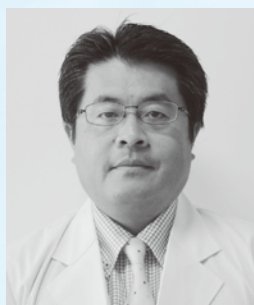
他の病院でも同様のカンファレンスはあるかもしれませんが、毎朝、しかも高いレベルで話が聞ける病院は聞いたことがありません。毎日新鮮な刺激を受け、また、自分も刺激を与えられるよう努力したいと思うようになりました。

その他の活動としては、人工呼吸器関連肺炎のサーベイランスなどICDの活動も始めています。院外の活動は大学から続けさせていただいている滋賀吸入療法連携フォーラム (SKR) を含め、吸入療法のステップアップをめざす会など吸入指導関連の活動に力を入れています。東近江医療センターでもぜひ活発な活動をしてゆきたいと思っています。

呼吸器内科は新病棟の一番上、7階にあり、とても見晴らしが良いところにあります。青々とした鈴鹿山系と、インターの傍なので窓から高速の渋滞具合を見ることができます。

どれほどの事ができるかわかりませんが、ここからできるだけ色々な事を発信してゆけるよう努力してゆく所存です。皆様お力添えのほう、どうぞよろしくお願い致します。

東近江総合医療センター 消化器内科に赴任しました！



滋賀医科大学
総合内科学講座 助教
(国立病院機構
東近江総合医療センター
消化器内科医長)

伊藤 明彦
(医学科15期生・平成7年卒)

この4月より、滋賀医科大学総合内科学講座、東近江総合医療センター消化器内科に赴任いたしました。

今回は、赴任して1か月間で、これはすごい！と感じたこの病院の特徴2つをご紹介します。

まず1つ目は、内科系の朝のカンファレンスです。

これは、以前にも滋賀病院だよりに紹介されていましたが、内科系医師（非常勤含む）・研修医総勢約20名で、毎朝8時または8時20分から行われているものです。前日日勤帯および当直帯の入院患者全員と、既に入院中で問題のある症例などの検討会で、その内容がとても素晴らしい！それぞれの専門領域の先生方が、全員が同じ講座のスタッフという認識のもと、全ての症例に対してカンファレンスに臨むわけですから、おのずとその内容は非常に高度なものになります。これは、残念ながら細分化された大学病院では不可能なシステムでしょうし、テレビで流行の地域中核病院でのDr.Gの研修よりも間違いなく優れているのでは、と思います。実際、この1か月間で、臨床症状や所見、検査値や画像の読みで、何度うならされたことか！卒後20年目

の私ですが、恥ずかしながら診断をつけられず原因不明として目の前をすり抜けていった症例が多々あることを思い知らされました。さらに素晴らしいのは、このカンファレンスが辻川副院長の名司会のもと、厳しくも温かいとても良い雰囲気が進むこと、若い先生にもってこいの環境だと思います。もし高度な総合内科医を目指すなら、是非当院で研修されてはいかがでしょうか。自信を持ってお勧めします。

もう一つは、消化器内科の紹介症例数の多さです。特に胆道系の処置が多い！ほぼ毎日ERCPまたはPTCDがある！これは、今までの先生方のご尽力によりこの地域で信頼を得てきた結果、確実に東近江地域での消化器診療の中核を担う存在になったということだと思います。辻川先生、五月女救急部長、酒井医師、水田医師とともに、その信頼を裏切らないよう、日々精進しなければと感じています。

ところで、私は一般消化器内科とともに栄養治療を専門にしてきました。僭越ながら、これから東近江総合医療センターに対して貢献できるのではと思うのが、この栄養の分野です。NSTはすでに十分な内容の活動をしてこられたようですが、まずは加算をとることとスタッフのより一層の栄養に対するスキルアップを図りたい。栄養塾と銘打った勉強会も始めます。また、この栄養の分野は、地域との連携が非常に重要ですので、そちらも意識しながら活動を開始します。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

泌尿器科の紹介



滋賀医科大学
総合外科学講座 非常勤講師
(国立病院機構
東近江総合医療センター
泌尿器科医長)
坂 野 祐 司
(医学科13期生・平成5年卒)

4月1日より、東近江総合医療センターに泌尿器科常勤医が復活いたしました。前任の常勤医が2009年3月に退職された後は、滋賀医大泌尿器科からの週2回の外来勤務で繋いでまいりました。滋賀医大泌尿器科学講座には、入局者0の暗黒時代もありましたが、ありがたいことに最近では毎年2名程度の入局者があり、若手を中心に医局員が増加しております。そのような背景もあり、4月からは私（平成5年卒、前任は社会保険滋賀病院（現地域医療機能推進機構滋賀病院））と藤原遼（平成22年卒、前任は野洲病院）の2名が、常勤医として着任することとなりました。

当たり前のことではありますが、毎日の外来診療、膀胱鏡・前立腺生検などの諸検査、泌尿器科における標準的な手術を行っていきます。また、泌尿器科には骨盤臓器脱などの女性特有の疾患を扱う女性泌尿器科、先天性および後天性小児疾患を扱う小児泌尿器科、といった専門領域があります。決して得意な分野ではありませんが、当院には婦人科、小児科の先生方が揃っておりますので、女性泌尿器は婦人科とともに、小児泌尿器科は滋賀医大の小児泌尿器科専門医と共同して小児科とともに、手術を含めて治療に関わりたいと考えています。

常勤医不在の時期には、外来で手術や化学療

法が必要と診断された患者さんは、滋賀医大に紹介して治療を施行し、加療終了後は当院外来で経過観察を行う、という流れで診療が行われてきました。滋賀医大まで高速道路を使って30分とは言え、それ程近い病院でもありません。患者さんとそのご家族の方には相当な負担になったと想像できます。当然、困難な症例で大学病院での加療が必要な方もおられますが、常勤医さえいれば大学まで行かなくて済むのに、という方が多数おられたことは事実です。

また、東近江市に在住しながらも、近隣の泌尿器科常勤医のいる施設で加療されていた患者さんが多数おられます。常勤医がいないことで、初診の病院選択の段階で当院が除外されていたケースがあったと思われます。大学以外の施設から当院へ、加療の継続を依頼する紹介が、このひと月の間だけでも10例程度ありました。

常勤医がいるといないで大違い、だと感じた今回の異動ですが、いてもいなくても同じ、だと思われぬよう努力してまいります。当院は教育施設でもありますので、そちらに対しても充実させていきたいと考えております。これからよろしくお願いいたします。



インフォメーション

平成25年度 卒業式

平成25年度卒業式は、3月10日(月)午前10時から本学体育館において
 挙行され、学長から次のとおり告辞がありました。

告 辞

学 長 馬 場 忠 雄

平成25年度滋賀医科大学卒業式を挙行するにあたり、ご多忙の中、ご列席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様ならびに教職員の皆様に御礼申し上げます。

本日晴れて卒業の日を迎えられた医学科95名、看護学科68名の諸君に心よりお祝い申し上げます。また、諸君の学生生活を支えてこられたご家族の方々にお慶び申し上げます。

平成22年度から法人化第二期の中期目標・計画、SUMSプロジェクト2010-2015「次世代を担う人材育成と医療科学・技術の創出」のもとに、全構成員が取り組んでいます。国立大学を取り巻く環境は年々厳しさを増し、平成24年度からの「大学改革実行プラン」では、ミッションの再定義が求められ、医学科においては、平成25年12月に、看護学科ではほぼ決定の段階であります。本学は、建学以来の理念のもとにリージョナルセンターとして、また、ナショナルセンター機能を持つ大学、すなわち「地域に支えられ、世界に挑戦する大学」としてミッションの再定義に応えることが一層強く求められます。

教育においては、地域基盤型教育を推進し、市民や患者さんと共に課題を見出し、課題解決に結び付けてゆくこと、臨床実習においては、地域の病院や診療所、保健所、福祉施設などで多くの方々にご指導とご協力を得て、充実をはかっています。また、NPO法人 滋賀医療人育成協力機構と共に地域の方々の生活や文化、さらに医療の原点を学ぶ支援をお願いしております。一方、TOEFLを1年生と3年生に課し、英語力の向上につなげ、国際化に対応する努力をしています。

研究面では、ナショナルセンター機能として寄与できると考えています。カニクイザルを用



いた再生医療は、iPS細胞をはじめ他大学や企業との共同研究が活発に行われ、また、インフルエンザワクチンの開発や遺伝的に制御されたサルを用いたがん免疫の研究、MR医学では、ナノダイヤモンドを用いた画像診断への応用、神経難病であるアルツハイマー病の早期診断法の確立、オーダーメイド医療によるがん医療や循環器疾患、とくに不整脈の遺伝子解析、医工連携によるMR下対応の医療機器やマイクロ波機器の開発など積極的に行われています。

疫学研究については、疫学研究拠点として昨年10月に、アジア疫学研究センターが開設され、さらに、オンリーワン型のリーディング大学院として「アジア非感染性疾患(NCD)超克プロジェクト」が採択され、アジアにおける生活習慣病を中心とした共同研究や留学生の教育により、国際的に貢献することが期待されています。また、国際的医療支援協力が、ベトナムでの心臓血管外科、インドネシアでの脳神経外科を中心に行われております。

本学附属病院の診療活動や地域連携などは、リージョナルセンターとして、高く評価されています。すなわち、平成24年3月に病院の再開発

は完了し、手術室、新生児特定集中治療室（NICU）、集中治療室（ICU）などの機能が充実しました。診療面では、心臓血管外科の手術は全国的にも高い評価がえられており、その他、がん治療や内視鏡を用いた手術、網膜手術など高度で低侵襲な医療により、地域医療の質の向上に貢献しています。昨年10月の週刊ダイヤモンドにおいて、各種病院機能評価項目による評価で、全国国公立大学病院を含む1,205の主要な病院中第2位（98点／100点）の高い評価が得られています。また、滋賀県がん診療高度中核拠点病院、地域がん診療連携拠点病院であり、さらに災害拠点病院などの指定に向けて努力しております。地域医療に関しては、国立病院機構東近江医療センターに、本年4月から本学の講座として総合内科学講座と総合外科学講座をおき、診療体制を整え、地域医療を担うと共に、本学の教育病院として、学生の臨床実習と研修医の総合診療医としての研修も担当しています。さらに、地域の高校との連携や公開講座を通して健康、医療、福祉に関する情報を積極的に提供しています。昨年6月から、開放型基礎医学教育センター（メディカルミュージアム）が完成し、地域医療関係者や地域の方々の教育にも活用されています。

なお、平成24年度補正予算と平成25年度予算で、臨床講義室3を含む臨床講義棟や福利棟の改修、災害時における救急医療に欠かせないヘリポートの設置が3月末までに完了します。体育館の避難所としての改修は、本日の卒業式に間に合いましたが、スキルズラボ棟の建設は遅れ、平成26年度夏ごろに完成する予定です。また、本学独自の予算で、内視鏡ロボットのダヴィンチSi、がんの診断に必要なPET-CT、スペクトを導入し、教育、診療面でさらに質は向上しています。

大学や附属病院の施設や設備が充実しても、それを活用する人材が少なければ機能しません。本学が教育、研究、診療機能において、わが国でトップクラスを維持し続けるには、卒業生諸君の若い力が必要なのです。医学科では、本年度卒業生のうち30名が初期研修医として本学附属病院で研修します。看護学科では、29名が本学附属病院で勤務します。他の病院で研修あるいは勤務する場合でも、本学で身につけた患者の視点での医療を実践し、充実した初期研修を行い、初

期研修終了後は、先進医療と高度医療、さらに臨床研究を修得できる力をつけるために、本学附属病院に必ず帰ってきて下さい。大学や附属病院で知と技（わざ）を磨き、その成果を社会に還元することが求められています。

国家試験に合格した卒業生は、国家認定の資格をもった医療人として働くことができます。しかし、その資格は大学で学んだ知識や技能を基に、さらに日々の厳しい研修で、知と技に磨きをかけて、はじめて生きたものとなります。そして、医療人には、倫理観が強く求められ、倫理観を疑う行動は、たとえ知識やすばらしい技があっても医療人としての信頼を失うことになります。

私は、諸君と同じようにこの3月で6年の任期を終えます。この6年間、卒業生に贈る言葉として、「一隅干照」、「日々新」、「研鑽」、「挑戦」、「奉仕」、そして今年は、「感謝」としました。いずれも医療人としての原点であると思っています。

結びの言葉として、インドの5世紀の劇作家、カーリダーサの黎明への挨拶（これは、ウィリアムオスラーの訳といわれています。）を送ります。

今日という日に目を向けよう
これこそ生命、生命の中の命なのだ
その短い行路の中には
君の存在の真理と現実がすべて含まれる
生まれ育つ喜び
行動の栄光
成功の光彩
昨日は夢にすぎず
明日は幻でしかない
精一杯に生きた今日は
すべての昨日を幸せな夢に変え
すべての明日を希望の幻と化す
だから目を見開こう、今日に向かって
黎明への挨拶はこれだ

諸君が入学時に提出していた決意書を卒業証書と共に、本日手元にお返しします。初心を忘れることなく、志を高く持ち続け、その達成を目指し、日々努力を重ねられること、また一人一人幸多からんことを祈念し、学長告辞といたします。

平成26年3月10日

医 学 科



医学科卒業生 95 名

■平成25年度医学科卒業生



以上 95 名

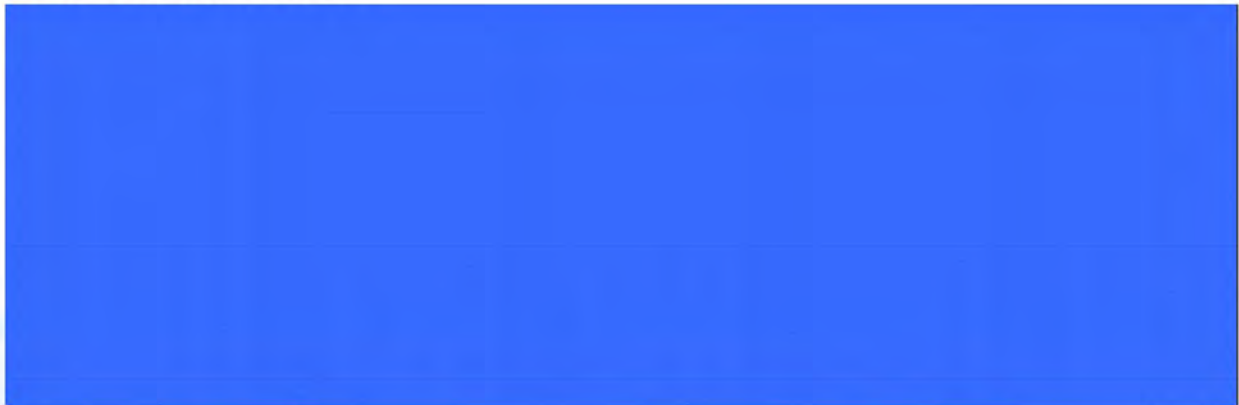


看護学科



看護学科卒業生 68名

■平成25年度看護学科卒業生



以上 68名



卒業生謝辞

記念品贈呈

学生表彰

平成25年度 学位授与式

平成25年度大学院学位授与式が、去る3月10日（月）午後3時から管理棟大会議室において举行され、次のとおり学位記（博士及び修士）が授与されました。



■博士（課程） 20名



（学位授与日：平成26年3月10日付）

■博士（論文） 8名



（学位授与日：平成26年3月10日付）



■修士課程 10名



（学位授与日：平成26年3月10日付）

平成25年度 学位論文学長賞等授与式

平成25年度に学位記（博士）（修士）を授与された者の中から、特に優秀な学位論文を発表した2名に、3月10日（月）の学位授与式において馬場学長から表彰状と副賞が授与されました。

また、滋賀医科大学シンポジウムの各賞・ベストティーチャー賞・優秀研究者・Doctor of the Year, 2013の各賞の受賞者に表彰状と副賞が授与されました。



博士論文学長賞

受賞者名 山 原 康 佑

論文題目 Obesity-Mediated Autophagy Insufficiency Exacerbates Proteinuria-induced Tubulointerstitial Lesions（肥満に伴うオートファジーの低下は尿蛋白による近位尿細管障害の悪化をもたらす）

修士論文学長賞

受賞者名 森 野 亜 弓

論文題目 脳梗塞患者の退院時の機能予後に対する発症 一來院時間の影響

第30回 滋賀医科大学シンポジウムの各賞

若鮎賞 Li Zhao

審査員特別賞 西 野 裕 香

奨励賞 山 本 裕 人

ベストティーチャー賞

呼吸器内科 講師（学内）

長 尾 大 志

優秀研究者表彰

内科学講座 教授

堀 江 稔

Doctor of the Year, 2013

医師臨床教育センター

高 島 光 平



名誉教授の称号授与

学校教育法第106条の規定により、滋賀医科大学名誉教授の称号が下記の先生に授与されました。

平成26年4月1日	元教授	馬	場	忠	雄
平成26年4月1日	元教授	服	部	隆	則
平成26年4月1日	元教授	西		克	治
平成26年4月1日	元教授	谷			徹
平成26年4月1日	元教授	野	坂	修	一
平成26年4月1日	元教授	岡	部	英	俊
平成26年4月1日	元教授	三ッ	浪	健	一
平成26年4月1日	元教授	安	田		斎
平成26年4月1日	元教授	平		英	美
平成26年4月1日	元教授	犬	伏	俊	郎

第37回解剖体納骨慰霊法要

5月31日(土)午前10時30分から比叡山延暦寺阿弥陀堂においてご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員および学生、教職員総勢約490名が参列し、第37回解剖体納骨慰霊法要が執り行われ、故人のご冥福をお祈りしました。

法要の中で、今回お祀りした47柱の御霊並びにご遺族に対し、塩田学長から感謝の意が述べられるとともに、医学生が解剖学を学ぶことの意義および、ご献体に接することによりその尊い御遺志に感謝することの大切さについて述べられました。

続いて、学生代表の鈴江隆志君が、解剖実習というかけがえのない経験を通じ、医療人としての道を歩む責任の重さを感じ、また大きなやりがいを持ち、故人のご遺志を胸に生涯をかけて医学の道に邁進することをご霊前に誓いました。

法要終了に引き続き、故人(献体者)に対する文部科学大臣の感謝状を学長からご遺族代表にお渡しし、併せて、学生の手によりご遺骨をお返ししました。

また、午後からは比叡山横川の大学霊安墓地において、ご遺族、ご来賓、学生等の参列の下に、納骨式が執り行われ、分骨いただいたご遺骨が納骨堂に安置されました。



学生代表の慰霊の詞



納骨式の様子



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

JULY 11, 2014

編集後記

入学式での学長式辞を伺いながら、ショウペンハウエルの著書「読書について」を思い出していました。彼は読書の功罪を知り抜いた上で、「知るためには学ぶべきである。だが知るといっても真の意味で知られるのは、ただすでに考えぬかれたことだけである。」と多読による思索の放棄を戒めています。

今年は創立40周年を迎える年であり、また新体制のスタートの年でもあります。滋賀医科大学での学生生活を通して、学生の皆さんが多くの知を得、医療人あるいは研究者として将来大きく羽ばたくための知的養育を培われることを願っています。

編集委員長 宮松 直美

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢(いきおい)が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

勢多だより No. 99

発行年月日：平成26年7月11日

編集：「勢多だより」編集担当者会議

発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人々の医への期待である。外に向
かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである。」